江戸の名所・王子

加藤　貴

はじめに
一　江戸図屏風の「王子」
二　王子権現社の祭礼と槍の交換
三　金輪寺と五香湯
四　狐火会と王子の繁栄
五　王子の狐人形
六　落語「王子の狐」
おわりに

論文要旨

江戸が巨大過密都市となり、身近な自然を喪失していくなかで、日常的には自然との交流が困難となっていったため、江戸市民は近郊の景勝地を遊覧することにより、その代償としていった。その一方で、都市民は個として存在し、生活の順調な進行を阻害する要因、つまり病気・火災・盗賊などの厄を除くことと商売繁昌を祈願するため寺社に参詣していった。このように江戸市民にとって名所は、自然との交流と神仏との交感によって、延気（気晴し）を約束してくれたのである。そのきざしは、一七世紀中期ごろからみられはじめるが、特に、一八世紀以降、江戸の近郊に多彩な名所が成立していき、江戸市民は名所をめぐる広範な行楽行動を展開していった。こうした点について、江戸名所の一つとして知られた王子を例にみていった。王子は、江戸日本橋から北へ約二里半ほどの日帰りが可能な場所で、荒川沿岸の低地部と武蔵野台地、あるいは荒川に流れ込む石神井川が生み出した渓谷など、変化に富んだ自然に恵まれていた。一方では、王子権現社・王子稲荷社・金輪寺という、強力な利益を保障してくれる寺社も存在した。こうしたことから、王子は、春には王子稲荷の初午や飛鳥山の花見、夏には王子権現の祭礼や石神井川沿岸の滝浴み、秋には石神井川沿岸の滝野川の紅葉狩りや虫聞き、冬には雪見というように、四季を通じた行楽地として、多くの江戸市民を集めていった。そして、王子権現の祭礼時に交換された厄除けのお守りとしての槍形、金輪寺で頒布された万能薬の五香湯、王子稲荷の参道で売られた土産物であるカラクリ仕掛の狐人形や、落語の王子の狐について、その成立、習俗の変遷などから、一八世紀中期以降に、王子が江戸の名所として有名となり、多くの江戸市民が訪れるようになると、それらの人々を目当てに、あるいは、さらに多くの人々が訪れるように、名所の側でもさまざまな装置を創出していったことが確認できた。

はじめに

江戸が巨大過密都市となり、身近な自然を喪失していくなかで、日常的には自然との交流が困難となっていったため、江戸市民は近郊の景勝地を遊覧することにより、その代償としていった。その一方で、都市民は個として存在し、生活の順調な進行を阻害する要因、つまり病気、火災、盗賊などの厄を除くことと商売繁昌を祈願するため寺社に参詣していった。このように江戸市民にとって名所は、自然との交流と神仏との交感によって、延気（気晴し）を約束してくれたのである。そのきざしは、一七世紀中期からみられはじめるが、特に、一八世紀以降、江戸の近郊に多彩な名所が成立していき、江戸市民は名所をめぐる広範な行楽行動を展開していった。(1) 本稿では、江戸名所の一つとして知られた王子地域に注目してみたい。

王子地域は、江戸日本橋から北へ約二里半ほどの日帰りが可能な場所であった。そして、荒川沿岸の低地部と武蔵野台地、あるいは荒川に流れ込む石神井川が生み出した渓谷など、変化に富んだ自然に恵まれていた。一方では、王子権現社・王子稲荷社・金輪寺という、強力な利益を保障してくれる寺社も存在した。こうしたことから、王子地域は、春には王子稲荷社の初午や飛鳥山の花見、夏には王子権現社の祭礼や石神井川沿岸の滝浴、秋には石神井川沿岸の滝野川の紅葉狩りや虫聞、冬には雪見というように、四季を通じた行楽地として、多くの江戸市民を集めていった。なお、王子地域が、江戸の名所として、特に注目を引くようになっていったのは、享保期（一七一六～三六）に八代将軍徳川吉宗が、飛鳥山に桜を植樹し、後に江戸市民の花見の名所となっていったことが大きかったと考えられる。本稿では、王子地域の中でも、王子権現社・王子稲荷社・金輪寺に焦点をあてて、名所の具体的な内容と、名所における変化とを明らかにしていきたい。

また、国立歴史民俗博物館に所蔵されている「江戸図屏風」には、王子が描かれているが、これについての検討も合わせて行うことにしたい。これによって「江戸図屏風」の制作者や制作時期を明らかにするための素材を提供できるのではと考えている。

一　江戸図屏風の「王子」

「江戸図屏風」右隻第三扇下方に「王子」と押紙が貼り込まれている場面がある。この場面は、斜めに右下へ真直ぐに延びる参道の正面に、朱塗りの三つの祠が並び、その前に三人の人物が描かれている（図1参照）。これは王子権現社を描いたものと理解できる。しかし、これが当時の王子権現社を正確に描いているかどうかとなると、疑問が出てくる。(2) この点について、別の絵画資料から検討してみよう。その前に王子権現社について概観しておこう。(3)

王子権現社は、豊島若一王子・王子宮・若一王子とも称されていた。その創建年次については諸説あり、史料的に確認することはできない。

ただ、元亨期（一三二一～二四）に、石神井城主であったという豊島左近太夫景村が、従来から熊野神が祀られていた王子権現社を再建するとともに、金輪寺を別当職に補任していることが確認できる。そして、これ以降、王子権現社は熊野信仰の地域的拠点としての性格をもっていった。室町時代には「豊嶋若一王子年行事」として古河公方足利成氏と祈禱をともなう歳暮の贈与という関係をもっていた。戦国時代には、永禄二年（一五五九）二月に北条氏康から二二貫八〇文の社領を安堵され、北条氏直からも社領を安堵されている。小田原戦争後の天正一八年（一五九〇）八月に、徳川家康は江戸に入府し、新領国である関東の経営を進めていくことになる。この一環として、翌一九年一一月に支配領国内の寺社に対して、所領寄進状を発給した。この時、王子権現社は二〇〇石の社領を寄進されている。その後、寛永一一年（一六三四）三月、三代将軍家光は芝神明宮・西久保八幡宮・目黒不動堂といった江戸府内および近郊地域の寺社の造営を命じているが、この時に王子権現社・王子稲荷社・金輪寺の造営も命じられている。そして、同年の冬にはこの二社一寺の造営は完了している。

さて、この王子権現社の縁起を記したのが「若一王子縁起」である。[4] これは全三巻からなり、詞と絵で構成される絵巻物の体裁をとっている。この絵巻には、寛永一一年に、家光によって造営された社殿と、それ以前の社殿が描かれている。造営以前は白木造・草葺、造営後は壮麗な極彩色・檜皮葺という違いはあるが、本殿はいわゆる権現造で、その前に神楽殿が配置されるということでは一致している（図2・3参照）。この「若一王子縁起」と「江戸図屏風」とを比較してみると、全く異なっていることが確認できよう。そこで、次に問題となるのは、「若一王子縁起」に描かれた社殿の信憑性である。そのため、「若一王子縁起」制作の経緯をみておく必要があろう。

社殿造営の完了する頃、寛永一一年一〇月に、家光は王子権現社を訪れ、別当金輪寺に縁起の有無などについて尋ねた。王子権現社の縁起は、中古に焼失した旨、金輪寺は回答している。そこで、家光は縁起の制作を命じ、林道春が詞書を、鈴木権兵衛が詞書の筆耕を、狩野尚信が絵を担当することとなった。まず詞書の制作が進められ、文案が出来上がったところで家光に提出され、若干の修正を命じられ、その部分を訂正し、寛永一六年閏一一月一七日に完成した。絵は、この詞書の趣旨にもとづいて描かれることとなった。絵を担当した狩野尚信は、王子を訪れ、金輪寺に止宿し、造営されたばかりの王子権現社・王子稲荷社や周辺の景観を画いて、縁起制作のための実地調査を行っている。なお、家光は寛永一四、五年頃に、小人目付を派遣して、王子権現社の縁起に関する事項を調査してもいる。こうして寛永一八年七月一七日に縁起は完成した。しかし、すぐには王子権現社に奉納されず、幕府の宝庫に納められていた。その後、承応三年（一六五四）一二月二五日に、模本とともに王子権現社に奉納され、金輪寺に保管されることとなった。そして、この縁起は、嘉永三年（一八五〇）四月、もしくは万延元年（一八六〇）一二月の火災で焼失してしまった。しかし、幕府絵所である板谷工房によって制作された模本が、現在財団法人紙の博物館に所蔵されており、「若

一王子縁起」の全貌を知ることができる。

このような「若一王子縁起」の制作過程や、家光による王子両社の造営を記念するためという制作目的[5]からすると、「若一王子縁起」に描かれた王子権現社の社殿や境内の景観は、寛永期の状況をよく示していると理解して問題はあるまい。とすると、「江戸図屏風」に描かれた景観は、どのように理解すればよいのだろうか。三つの祠を並べて描いているのは、王子権現社が熊野三神を勧請したという伝承を前提とし、このイメージを画像化したと理解すべきであろう。このことから、少なくとも「江戸図屏風」を描いた絵師は、王子権現社を実際にはみていないことになる。家光は、寛永一一年二月以降、しばしば王子方面で狩を行っている[6]。「江戸図屏風」の発注主が家光の側近で、家光に随従していたならば、現実の王子権現社をみているはずである。しかし、「江戸図屏風」が寛永一一年二月以前の状況を描こうとしたのであれば、その時期に家光らは王子を訪れていないので、造営以前の王子権現社を実際にはみていないことの一応の説明にはなる。しかし、このように理解すると、寛永一一年二月以前に、王子権現社と家光を結びつけるものがなくなってしまう。家光の事績を顕彰しようとする「江戸図屏風」で、なぜ王子権現社を描かねばならなかったのであろうか。ここで浮かび上がってくるのは、後述する家光の将軍継嗣をめぐって、春日局が王子権現社に祈願したという伝承である。現在のところこの伝承を実証することはできないが、もし仮に、この伝承が事実を反映したものとすると、家光の将軍継嗣に功のあった王子権現社を描かねばならなかったということになる。しかも、こうしたことを知りうるのは、家光、あるいは春日局の身近にいた者ということになる。「江戸図屏風」の成立・制作者をめぐる議論に、もう一つ謎を加えることになってしまうが、今後の検討にまちたい。

二　王子権現社の祭礼と槍の交換

王子権現社の祭礼は、七月一三日に行われ、別当金輪寺によって、神楽殿で田楽躍が執行された。この祭礼は「槍祭り」とも呼ばれていた。これは、田楽躍が執行される神楽殿の回りに槍を奉納し、交換するという習俗があったからである。そして、現在でも王子神社の社務所で「槍」が頒布されている（図4参照）。まず、この「槍」の由来書をあげておこう。

御槍の由来

徳川三代将軍家光公は剛毅豁達、徳川十五代の基礎を固めた人でありますが、竹千代と呼ばれた幼少の頃は気の荒い少年であったため、その弟、国千代を以て将軍の後嗣としようと企てる一派があったので、竹千代の乳母、春日局は大いに心痛して、百方奔走すると共に神仏に祈請して、後嗣達成を念願しました。その折当社にも深く祈願し念願叶って、竹千代が目出度く三代将軍となったので、お礼に槍を奉納しました。

世人は、これを「開運攘災の御槍」と尊重し、雛形の槍を作り神

前に祈ってこれを受け、神棚に祭りました。これを念じて働くときは運を開き、病に苦しむ者もこれを念じて患部を撫でるときは、忽ち病魔が退散するとて、大祭にはこの御槍を受ける者で賑わい、為に、当社の大祭が「王子権現の槍祭」と呼ばれるようになりました。

春日局が家光の徳川三代将軍襲職を王子権現社に祈願し、願が成就したお礼に槍を奉納したという伝承があり、これにあやかってか、祭礼の日に雛形の槍を作り奉納し、前に他の人が奉納した槍を持ち帰るという習俗があった。春日局の伝承の実否を確認することはできないが、前述したように、徳川将軍家、あるいは家光と王子権現社との関係を考慮すると、こうした伝承が一般に受け入れられやすい条件があったといえよう。

槍の交換という習俗が、いつごろから行われるようになったのかは不明である。「若一王子縁起」をみる限りでは、槍の交換に関する記事はなく、絵も描かれていない（図5参照）。槍の交換という習俗を記した最初の文献は、享保二〇年（一七三五）に刊行された菊岡沾涼の「続江戸砂子温古名跡誌」巻之一である。七月一三日の祭礼の日に、

氏子共竹にていろ〳〵の鑓を作り、拝殿の廻りへこれをさし置

とある。[7] また、寛延四年（一七五一）に刊行された奥村玉華子の「再訂新増江戸惣鹿子名所大全」にも、

氏子ども竹にてさま〳〵の鉾を作り、拝殿の四面に建置く

というように、同様の記事がある。[8] 右の記事の中で、「拝殿」とあるが、これは後年の記録類からみて、神楽殿の誤りであろう。少なくとも、右の記事から、一八世紀中期には、祭礼に際して田楽が躍られる神楽殿の周囲に、氏子たちが槍を立てて奉納していたことがわかる。

前述したように、近世に王子権現社の祭礼は、毎年七月一三日に行われていたが、寛政七年（一七九五）には七月一七日に延期されている。この時に王子田楽を見にきた田安宗武の家臣で、国学者・歌人であった長野清良は、次のように記している。[9]

拝殿のもとによりてみれば、とみに竹をたてゝかこひして、その竹にかりそめなるさまに作りなしたる矛かた並ひ立たり、是は所のならはしにて、いにしへよりす也ときくをさめほこなり、ねぎ事かなへハをさめ奉るとか、されハその願成就して納め奉れる矛をまたかり奉るとて、皆人持帰りて家におき、をのがねき事かなふ時、あらたに矛かた作りそへてまた納ることなりとそ、けふもかり奉りてかへるもあり、願成就せしと見へて、新たなるをもてまゐりて納むるもあり、僕も本社の正面に誰人かたてけむ成就の矛あるを二柄かり奉りて念しおきぬ

清良は、神楽殿の周囲に廻らされた竹垣に並べ立てかけられた槍を見て、これは昔から行われている土地の習俗で、諸願成就した者が槍型を奉納し、諸願ある者はその槍型を持ち帰り、諸願成就の時に新たに槍型を作り奉納するものであると記している。こうした習俗は氏子だけのものではなく、参詣者は誰でも槍を奉納・交換できたようである。清良も槍二柄を持ち帰っている。

ここでは槍は諸願成就のための祈願物とみなされている。もともとは

王子権現社の氏子の間での習俗であったものが、一八世紀末には祭礼の時の一般の参詣者にまで拡大していっている。

享和二年（一八〇二）の王子田楽見物記録である「王子権現田楽躍之図」には次のようにある。[10]

王子権現の神事ハ毎年七月十三日にして、此日ハ参詣の人々鎗の形を竹にてこしらへ、紙もてさま〳〵の鞘かけ、宝前に納め、又玉垣に納め、在所の鎗を拝受して我家の棟木にさし置て、年の禍災をまぬかるゝと也、門前に此納鑓を売処もあり

参詣者が竹槍に紙でさまざまの鞘を付けて奉納し、また、拝受した槍を持ち帰り、家の棟木にさしておくと、一年間の「禍災をまぬかる」のであった。つまり、一九世紀になると、槍は諸願成就の祈願物だけでなく、これに加えて除災のお守りとしての意味も含まれていった。また、そのためか、王子権現社の門前には奉納の槍を売る店も出るようになっていった。もとは自分で作って奉納した槍も、門前の店で買って奉納されるようになっていったのである。

こうして槍をめぐる習俗が江戸市民の間でも年中行事化していったようで、享和三年に刊行された「増補江戸年中行事」に、王子権現の祭礼の日に、「参詣の貴賤、竹にて作る鑓ほこを奉納せしむ」というように、槍の奉納の記事がみられる。[11]

文化三年（一八〇六）に王子田楽を見にきた小林一茶は、「けふ神垣に鎗を納」めて「外のやり持かへる」のは、「魔降伏のためとかや」と記し、「鑓やらんいざ〳〵踊れ里わらは」という句を作っている。[12] さらにその槍をめぐって、

けふはおの〳〵鑓やうのもの広前にさしつゝ、外人より納りし鎗をとり替て、西へ行あり、東へかへるあり、宮人に問へば、是なん悪魔降伏のためとかや、さもあらばありなん、あくまで貪欲の眼をいからし、おのれがなせるよりいさゝかも増りてめほしきを争ひうばひ、或はつかみあふ、あはれ、神を尊とむ心にもあらば、いかで善悪を論ずべき、みづかがきの一葉なりとも事足らん、あさましきありさまなり

と記している。[13] また、文化一〇年に王子田楽を見物にきた、伊予吉田藩の藩医で、和学者であった本間游清も次のように記している。[14]

又此日道の行手にさゝやかなる鑓を作りて売る、御社に詣る人、此鑓を買て御社にたてまだし、扨かなたにさき〳〵をさめある鑓を請取て帰る、是を家におけハしら波の立よらすとてかくハする也、拝殿のめくりにゆひわたしたる竹垣に、かの鑓たておくに、たれも〳〵よき鑓とらんとて、人のさゝげ来て、たつるをおそしと争ひとりてもていぬるもいと〳〵興あり

王子権現社に向かう参道で槍が売られており、また、奉納した槍より良い槍を持ち帰ろうと、参詣者の間で争いも生じるというように、槍をめぐる習俗がエスカレートしていったことがわかる。これは田楽法師の被る花笠を奪い合う「喧嘩祭り」の様相が槍の交換にもみられるようになっていったことを示している。

さらに、文化一一年に王子田楽を見にきた十方庵敬順は次のように記

している。[15]

此日かぐら殿の廻りには竹行馬を結置に、遠近の人々大方は武士の徒、紙にてこゝろ〳〵に拵えし鎗を大小となく、一本ずつ持来りて、此行馬にさし置、余人の奉納せし鎗と取替家に持帰り置ば、盗賊除の守りによしとて、数千万億の大小の鎗髪にありて夥し

槍を奉納するのは武士が多いとしており、槍は盗賊除のお守りで、数多くの槍が奉納されており、大盛況であったと記している（図6参照）。

文化一一年に刊行された、江戸及びその近郊の寺社の霊験を記す万寿亭正二の「江戸願懸重宝記」[16]には、槍のもたらす利益について次のように記されている（図7参照）。

○王子権現の鎗

王子権現の祭礼ハ毎年七月十三日なり、此日権現の社人およひ近隣の百姓家より神前にゆき、鎗を置て祈念なすに、悪事災難をまぬかるゝといふ、諸人此日此神前にいたりて我願望を念じ、神前に納めある鎗を一本持かへりて是をかけおきて、翌年又七月十三日に神前にいたりて前年持かへりし鎗をふたゝび持行、また神前にある鎗と取かへて我家にかけおくなり、かくすれば諸願成就するのミならず盗難火難をまぬかるゝと諸人此鎗を乞請にゆくもの多し、はじめての時ハ、地内又ハ途中にても小さ鎗を求行て奉納する也、毎年かくして奉納なしてハ取かへ〳〵する時は、心願成就し家内息才なりとて毎年々々此日には群集なすなり

鎗祭りの神事ハ正午の刻にてぎしきあつて、なほさんけいなしたる人にたずねとひくハしきことをしるべし

つまり、毎年槍を奉納し取り替えれば、諸願が成就し、盗難・火難除のお守りとなるので、祭礼の日には大勢の者が参詣した。はじめて参詣する者は、境内あるいは参道で売られている小さな槍を買って奉納するというのである。また、「槍祭りの神事」とあり、文献の上では初めて「槍祭り」の名称が出てくる。

文政一〇年（一八二七）に刊行された岡山鳥編の「江戸名所花暦」には、

信心の輩、思ひ〳〵に少き槍を拵、神前にさゝけ置て祈念なし、いたゝきて帰る、参詣の人々、交易することあり、火難、賊難を除るといふ

と記されており、[17]参詣者が槍を交換することもあったようである。

天保九年（一八三八）に刊行された斎藤幸成の「東都歳事記」には、

参詣の輩、神前に小き鎗を納め、先に余人の納る所の鎗と取かへて家に収め、火災盗難除の守とす、翌年此鎗の一本を添て奉納す、故に又やりまつりともいふ

というように、毎年、前年の槍に新しい槍を添えて、都合二本を奉納し、また一本を持ち帰るという習俗が江戸市民の間で年中行事として定着しており、槍祭りの名称も定着していたようである。[18]

天保九年頃に成稿したという「砂子の残月」には、

今日江戸及び近在より諸人参詣す、志願ある所の者は竹竿を以て鑓を作り、是を神前に納め、又は社内にある所の竹竿鑓を請乞て携持て家に帰る

とあり、[19] 嘉永六年（一八五三）に刊行された山崎美成編・橋本貞秀図の「大江戸図説集覧」にも、

毎年七月十三日田楽躍あり、寺中十二坊よりこれをつとむ、参詣の者紙細工の槍を納めありしを受てかへり魔除とす、此神事を俗に槍祭りといへり

というように記されていて、[20] 槍の交換の習俗が、江戸市民の間で一般化していたことが、これによっても確認できる。

さて、奉納される槍には、大小さまざまあったようであるが、明治中期には次のような形態であった。[21]

王子神社に詣て、先つ拝を為すに、神前に小さき槍数多納めてあり、其柄は大抵竹にて一尺許なるを、金紙をもて捻り巻き、丹色に塗り、其頭は鞘をはめし形にて木製なり、是れをは墨染若くは藍にて塗れり、皆参詣人の納る所にて、是日参詣人は、各々其持ち来りしを納めて、他人の納め置し者を請ひ去り、家に蔵して火災及ひ盗難除の守護とし、翌年其槍に一本を添て奉納するを例とす、故に此祭典を槍祭りともいふ。

つまり、柄は竹で、長さ一尺ほどを丹色に塗り、金紙を捻り巻いてあり、穂先は鞘をはめた形で、その鞘は木製で、墨染か藍で塗ってあった。清水晴風が編んだ郷土玩具図録で、明治四一年（一九〇八）に芸艸堂から刊行された『うなゐの友』第四篇には、同様の図が掲載されている（図8参照）。また、槍を鞘に納めるという形式をとるのは、太平の世を祝するということであろうか。[22] 現在王子神社の社務所で頒布されている槍も、右と同様のものである。また、祭礼の日だけでなく、一年中いつでも槍を頒布してもらえるが、祭礼の日の槍の奉納・交換といった習俗はいつしか廃れてしまったようである。

ところで、こうした槍の交換とは別に、王子権現社の祭礼の時に執行される「田楽躍」に関しても、槍をめぐる習俗がみられる。この習俗をみていく前に、簡単に田楽躍の行事の式次第を確認しておこう。[23]

前述したように、田楽躍は王子権現社の別当である金輪寺中によって執行された。その式次第は、①金輪寺で開始の合図の太鼓を打ち鳴らす。②囃子方が神楽殿に昇り、横笛・太鼓を奏す。③金輪寺住職の行列が入場してきて、住職等が席につく。④田楽法師を迎える七度半の儀式。⑤田楽法師の行列が入場し、それぞれの位置を定める。⑥田楽躍一二番が躍られる。⑦一二番の途中で田楽法師の被る花笠が見物人に投げられ、花笠の奪い合いという、いわゆる「喧嘩祭り」が行われる。⑧終了の式、以上である。また、金輪寺住職の行列の構成は、基本的には、法師武者一人が先導し、警固が金輪寺住職の前後につき、稚児二人が金輪寺住職の前の左右に位置し、金輪寺住職には傘持・履持・白衣の丁が随い、最後に七度半の使者が続くという形であった。田楽法師の行列の構成は、同様に法師武者が先導し、四魔帰武者二人に続いて、田楽法師八人という形であった。

こうした田楽躍の式次第にも、時期によって若干の変化がみられるようになってくる。田安家臣で狂歌師として知られた唐衣橘洲（小島源之助）が、寛政一二年（一八〇〇）に王子田楽を見物した時の記録である

「王子田楽記」には、次のような記事がみられる。[24]

からうじて色めきわたるは、今やと見るに、氏子どものさはやかに出たちたる拾余人、色どりたる竹の鑓もちてどよめくが、拝殿のまへにきたり、南北にわかちて、いどみたゝかふさまするは、神軍の余波なるべし、はては、竹の鑓そのまゝうちをきていぬるを、もの見の人とよみわたりてとるもいとらうがはし

金輪住職の行列が入場してくる前に、神楽殿の前で氏子たちが向い合い、色とりどりの竹槍を突き合わせるという儀式が行われ、その後に、右の氏子が投げ捨てた槍を見物人が奪い合ったというのである。

これは後には、次のように変化していった。土佐の儒者で、塙保己一の「群書類従」の編纂を助けた宮地仲枝が、文化元年（一八〇四）に王子田楽を見物した時の記録である「観田楽記」には次のような記事がある。[25]

先拝殿階上ニ畳ヲ敷キ、氈ヲ敷キ、斑幔ヲ張リ、別当法師出張ノ坐ヲ設ク、其後幼童六、七人計儀杖（柄ヲ竹ニテ鞘ヲ紙ニテ作リタル槍ナリ）ヲ打カタギ、エイ〳〵ト声ヲ上ケ、楼門ヲ入リ、社ヲ回リ（左ヨリ右ニ）、楼門を出ツ、如此スル事数次

また、先にも掲げた本間游清が文化一〇年（一八一三）に王子田楽を見物した時の記録には次のような記事がある。[26]

まづはしめに十まりなく童子七人はかり竹の鑓をもち、又割竹を手ことにとりて、あゝと声をうちあけはしり出、拝殿をめぐりて寺に帰れば、甲冑よろひたる法師割竹をつきて出くる（図9参照）

さらに、清水家の御広敷用人を勤めた村尾正靖が文化・文政期（一八〇四～三〇）に王子田楽を見物した時の記録である「江戸近郊道しるべ」巻九には次のような記事がある。[27]

八鼓過る比、別当の坊にて太鼓をならす、させる拍子もなく打つゝく時に、近村の小児等あまたさま〳〵の作り鞘したる竹のやりをかたけ、細竹のさゝら子ニわりたるを打ふりて、別当の門内より走り出、楽堂の西より社の前迄の見物の人を払ふ、みだりニわめき、のゝしりて、割竹にて人ともいはす打たゝき、元の如くたちかへる、如此する事三、四回にて、楽堂の上の東の隅ニ布衣の装束したるもの三人在て、太鼓を打

つまり、文化期になると、氏子に代って、村の一〇歳位の子供たち六、七人ほどが、鞘を紙で作った竹槍を持って、金輪寺の門内から走り出て、神楽殿の周囲を左から右に回りながら、「エイ〳〵」あるいは「あゝ」と声をあげ、金輪寺に走り帰るということを数回行っている。こうして金輪寺住職の行列が入場してくるのである。

こうした儀式が追加されるようになった理由は、村尾正靖が指摘しているように、金輪寺住職が入場し、拝殿に設置された座につくまでの通路から、見物人を追い払うことに、この儀式の意味があったといえよう。元来は、金輪寺住職の行列の通路をあけさせる先払いの役は、法師武者の勤めるところであったと考えられる。しかし、一八世紀末になると、田楽見物の人々が、境内にあふれかえるようになり、法師武者による先払いのみでは、通路をあけさせることができなくなってきた。こうして

金輪寺住職の行列の通路をあけさせるための儀式が、新たに追加されるようになったと考えられるのである。こうした儀式の追加とともに、花笠の奪い合いがエスカレートしてきて、神楽殿の周囲に竹矢来が設けられるようにもなっていった。

さらに、文政期になると次のような儀式もみられるようになる。江戸下谷御成道で医師をしていた加藤曳尾庵が文政四年（一八二一）に王子田楽を見物した時の記録である「我衣」巻一六には次のような記事がある。[28]

扨夫より七度半の御使といふ有り、白張に烏帽子着たる下部の、袋入の参内傘をかつぎて寺の門より本社の前迄ひたはしりに至る、十二三歳童数十人、割竹を持て是を追ふ、かくする事七度半也

七度半の儀式の時に、一二、三歳の子供が数十人割竹で七度半の使者を追うということが行われていたことがわかる。

天保七年（一八三六）に刊行された「江戸名所図会」一五には、

王子村の童子、手毎に竹の鉾を持ちて警固す、祭終つて後、参詣の貴賤かの鉾を携へて帰り、火災盗難を除くの守護とす、これも古よりの習俗とぞ聞えし

とあり、[29] 弘化四年（一八四七）に刊行された松亭金水の「江都近郊名勝一覧」にも、

此日王子村の童手毎に竹の鉾を持て警固す、祭終りて参詣の貴賤かの鉾を携へ火災盗難を除くの守りとす、是旧例なり

とある。[30] 王子村の子供たちが竹槍を持って警固し、祭礼が終ると参詣者がその槍を火難・盗難除のお守りとして持ち帰るという習俗がみられるのである。ここでは奉納の槍と、子供の持つ槍とに混同が生じている。この七度半の使者を追い返す村童たちの持つ槍から槍祭りの名称が出たのではないことを確認しておきたい。

明治になっても七度半の使者を村童が楼門の外で竹槍で打って追い返すという儀式は行われた。神仏分離後、王子田楽が王子神社と氏子たちによって執行されるようになって以降の、王子田楽の式次第を記した「田楽式ノ記」には、

七度半ノ儀式、是ハ社務所門前ヨリ傘ヲ持、其前後ニ子供二十人花鎗ヲ持、之ヲ警衛ス

とあり、[31] また、山下重民「観王子神社田楽記并考証」にも、

かくて神職の門より、前の長柄の傘持ちたる者出来るに、かねて楼門外に集り居る村童等、長き篠竹もて之を撲てり、是も年々の例なりとす、彼者楼門より入て、神殿の前に至り、傘を植ていみじく礼拝し、小足に趨りて楼門を出れは、亦撲たる、しかく往返すること七度半にしてやみぬ、之を七度半の使といふ

とあるように、[32] 右の儀式が続けられていたことが確認できるが、この槍を見物人がお守りとして持ち帰るということはなくなったようである。

本節では王子権現社の祭礼の時の槍をめぐる習俗について述べてきた。一八世紀中期から一九世紀初期にかけて、氏子の奉納から、参詣人が誰でも奉納・交換するようになり、槍のもつ意味も、所願成就のための祈願物に加えて、火難・盗難除のお守りとしての意味も付加されていった。

これは王子権現社が庶民にとっては、村の鎮守から江戸市民の信仰対象へと拡大していったからと考えられる。その背景には、王子が江戸近郊の名所として、一八世紀中期からクローズアップされてきたことがあげられよう。

三　金輪寺と五香湯

王子権現社・王子稲荷社の別当であった金輪寺の創建時期についてもよくわからない。[33] ただ、八幡太郎義家が、前九年の役に際して金輪寺の社頭で金輪仏頂の法を修せしめ、また、凱旋の時に甲冑を金輪寺の社頭に奉納するとともに、「夷賊」と呼ばれた安部頼時・貞任・宗任といった敗死者の霊を祀って「禅楽」にいたらしめた。このため、山号を禅夷山といい、寺号を金輪寺と称したという伝承が残されている。金輪寺は、中世には新義真言宗に属していたが、慶長一四年（一六〇九）に中興といわれる宥養が入寺すると、古義真言宗へと改宗し、古義真言宗の関東触頭五ヵ寺の一つとしての地位を得ると同時に、王子権現社とともに、王子稲荷社の別当寺となった。宥養は、慶長一三年の宗論に証人として立合い、同一九年の大坂の陣に際しては祈禱札を家康の陣に持参するなど、家康・秀忠の重要なブレーン的存在であった。なお、金輪寺の歴代の住職は、京都仁和寺の院家光明院の住職をも兼帯した。

その後寛永一一年（一六三四）、幕府によって王子権現・王子稲荷両社の社殿とともに金輪寺の堂塔の造営が行われた際、仏殿の西続きに将軍の御座所が設けられてから御膳所となり、享保五年（一七二〇）の修理の際に、南の崖際に別に将軍の御座所が設けられ、その前に舞台が設けられた（図10参照）。この舞台からは、向いに飛鳥山を望み、眼下に石神井川を見おろし、四季の景物を楽しむことができたという。また、安永五年（一七七六）には徳川家治の日光社参の際の小休所に命ぜられている。[34]

さて、この金輪寺では、五香湯（五香散）という万能薬を頒布していた。本節では、この五香湯についてみていくことにしよう。「若一王子縁起」下巻第二段には次のようにある。

> 或時託宣して、五香の薬の方をさつけられしより、其薬をのむもの、衆病悉のそく、神の恩徳甚厚、もろこしの真人の竜宮の秘方を伝へしも、いかてかこれにまさるへし、薬師如来のおなしくましまし宮なれハ、瑠璃の壺の露の潤の人をたすくる験にて、仏を医王と号する事ハ、一切衆生の病をいやす故なりとあるも、けにもとおほへ侍る

絵にも五香湯を頒布していると思われる場面が描かれている（図11参照）。また、後のものであるが、下札には「王子七不思議」の一つとして「権現託宣の五香散」があげられている。[35] これからみると、五香湯は王子権現の託宣により、金輪寺で頒布しているものと理解できる。

寛文二年（一六六二）に刊行された「江戸名所記」巻七の金輪寺の項に、

> 当寺に万病妙応の五香湯あり、近国の人民これを信服するに、諸病

をいやす

とある。[36] 一七世紀中期には、五香湯の存在が江戸市民の間でも知られるようになっていたことが確認できよう。さらに、貞享四年（一六八七）に刊行された「古郷帰の江戸咄」巻二の王子村金輪寺の項には次のような記事がある。[37]

当寺に万病妙応の五香湯有、近国の人民、是を信服するに、諸病をいやす、いつの比、何ものゝ云出しけるぞや、案内の乞やう、小声なれバ、弟子の私に合たる、薬をあたふる故に、其妙すくなし、大音に案内を乞へバ、住持の耳に通る故に、弟子の私ならざると云によりて、かしこへ五香望て行ものハ、おこがましく大音声にて、案内を乞入事おかしかりけり、然バいつかたより来るものにも、湯漬飯に奈良漬の香の物を、そへて出しもてなす也

ここでは、弟子ではなく、住職の調合した五香湯を授与してもらうためには、大声で案内を乞わなければならない、という作法が記されている。また、五香湯を求めて訪れる者には、湯漬飯に奈良漬を添えてもてなしたことも記されている。こうしたことが記されるほどに、五香湯を求めて金輪寺を訪れる者が多くなってきていたのであろう。五香湯については、これ以降、諸書の記事に、特に変化はみられないが、近世を通じて頒布され続けていった。天保七年（一八三六）に刊行された「江戸名所図会」一五には次のようにある。[38]

五香湯　王子権現縁起に曰く、ある時託宣して五香の薬を授けられしより、その薬を服するもの諸病悉く除く、神の恩徳甚だ厚し、もろこし真人が竜宮の秘伝を伝へしも、いかでかこれに増るべき、薬師如来のおなじくましまし宮なれば、瑠璃の壺の露の潤の人を助くるしるしにて、仏を医王と号する事は、一切衆生の病をいやす故なりとあるも、げにもとおぼえ侍ると云々、このくすりは別当金輪寺より出す、一切の病によく、殊に小児に用ゆるに験あり

五香湯が特に子供の病気に効果があるとされるようになってきている。また、文政一二年（一八二九）頃に刊行された「誹風柳多留」一〇九編には、

金輪寺御薬取を食づかせ
白狐のやうな粥を出ス金輪寺

という川柳が載せられているので、[39] 江戸市民の間では、その存在をよく知られていたのであろう。

なお、「新編武蔵風土記」巻一八には、

当寺御膳所ノ節。年内初度ニハ。五香散ト称セル神薬。及野菜一台ヲ献上スルコト恒例ニテ。時服白銀若干ヲカヅケラルト云リ。

とあり、[40] 五香湯が将軍家にも献上されていたことがわかる。こうしたことが五香湯の効能の強力さを、江戸市民に認識させることにもなったのではなかろうか。

寺社参詣の目的の大きな部分に、病気直しがあったことは、はじめにも指摘したが、万能薬が金輪寺で頒布されていたことも、江戸市民を王子へ誘う要因の一つとなっていたと思われる。

四　狐火会と王子の繁栄

王子稲荷社についても、創建の時期を明らかにしえない。ただ、王子稲荷社は、古くは岸稲荷と呼ばれていたという。岸稲荷の名称は、王子村が古くは岸村と呼ばれていたことによる。岸村から王子村への村名の変更は、同地に王子権現社が勧請されたからという。[41]

こうした伝承が史実を反映したものであるとすると、王子稲荷社の創建は、王子権現社の創建より古いことになろう。中世の王子稲荷社について知るところはないが、土着の神として地域の人々から信仰されていたと考えられる。このことを反映した伝承がある。「若一王子縁起」下巻第一段には、

此社のかたハらに、稲荷明神をうつしいハひけれハ、毎年臘晦夜、諸方の命婦、此社へ集りきたる、其ともせる火の山中に、つらなりつゝける事、そくはくの松明をならふるかことく、数斛の蛍をはなち、飛しむるにたり、其道の山をかよひ、川辺をかよへる不同を見て、明年の豊凶をしるときこゆ

とあり、また、後の下札であるが、「王子七不思議」の一つとして

一毎年十二月晦日の夜、諸方の狐、火燈して来る、関東三十三ケ国の稲荷の惣つかさなり

ともある[42]（図12参照）。さらに、寛文二年（一六六二）に刊行された「江戸名所記」巻七の金輪寺の項にも、次のようにある。[43]

稲荷大明神ハこれおなしく王子の寺内なり、若一王子のやしろよりハ、一町ハかりかたハらにあり、当社ハ関東所々にくハんじやうしてあがめまつる稲荷明神の棟梁なり、毎年十二月晦日の夜ハ、関八州の狐どもこの所にあつまり狐火をともす、この地下人等ハ、燐火のとぼりやうに依て田畠のよしあしをしるとなり、二月の初午の日は諸人参詣していのり申すとかや

王子村の稲荷の狐鳴こゑハ、こん〳〵りんじさいはひわいと

つまり、王子稲荷は東国の稲荷社の総司といわれ、現在の王子二丁目交差点の所に榎があり、毎年大晦日には東国の稲荷神の使いである狐が集まってきて、ここで装束に改め、王子稲荷に参殿したというのである。そして、土地の農民はこの時に灯った狐火によって翌年の豊凶を占ったという。「新編武蔵風土記」はこれを「狐火会」と称している。[44] こうしたことは、近世前期においても、王子稲荷社が農業神としての性格を強くもっていたことを示すのであろう。また、この狐火会に関する記事は、これ以降の地誌類に必ず記載されていっている。そして、天保九年（一八三八）頃に成稿した「砂子の残月」に、

王子の狐火

歳時記　装束榎といふあり、毎年十二月晦日夜此木の許にて群狐火をともす也、此火を以農民明年の豊凶を卜す、今夜社内参詣群参すとあるように、[45] 王子稲荷信仰が盛んになると、後には江戸市民もこの狐火会を見物に訪れるようになっていったようである。

さて、江戸における稲荷信仰は、近世初期から盛んに行われたが、一

七世紀末から一八世紀にかけて、江戸近郊農村部の霊験あらたかな稲荷社が急に注目されるようになり、一八世紀後期になるといっせいに流行神現象を引き起こし、多数の参詣者を集めるようになった。そして、その後もはやりすたりを繰り返していったという。(46)

王子稲荷社もこの内に含まれ、一八世紀後期以降に多くの参詣者を集めるようになっていったことが、諸書に散見される。例えば、文化一一年（一八一四）頃に訪れた十方庵敬順は、次のように記している。(47)

同所西の坂をくだりて稲荷へ三町あり、関八州の稲荷司さとかや、初午殊に賑はしく、続ひて例月の午の日、正五九月は、ひとしほ歩みをはこぶ人多し、中より別して繁昌し、石の玉垣宮居花表にいたるまで、壮麗に追々再建し、飛鳥山のこなたより思ひ〳〵に奉納の石燈籠の常夜燈又夥し、此社頭にいたる路傍の春は両側の桜尤も美花にして、立春七十六日目頃よりを旬とす、或は杜若の水面に紫きを競ひ、山吹連翹の色をあらそふ風情、扨は東山の耕地を一面に眺望し、夏はほたる、秋はむし聞紅葉、冬は雪見の頃まで、人足たゆる時なく本所向島辺と一対といはんか

あるいは、次のようにも記している。(48)

一　飛鳥山は王子の東三町にあり、此地は中古、有徳尊君、大岡越前守忠相に命じたまひ、当所の台を伐ひらかしめ、享保年間数株のさくら名花のみを植せしめたまひぬ、是全く公御一人遊覧したまはん為にはあらず、此地甚麁悪の片鄙にして、近郷に農家少なく、又は邂逅にありといへども貧村のみにしてかしけたる土地なりしを、当所に数株の花王を植さしめたまひてより、春秋の間遠近の飄客、又はもろ〳〵の雅人の遊山所となり、花咲そめるあしたよりもみぢうつらふゆふべまで、都鄙の男女爰に集ひ来り宴を催しあそぶによりて、自然と追々に家居建つらなり、茶店若干出来て、一村及び近郷の潤ひとはなれり、是文王の霊台、霊沼の慈愛に争が劣らん、近年別して料理をひさぐ酒楼は、互ひに包丁と器物の好酬をあらそひ、中にもあふぎや、海老屋の二軒茶屋は、軒をならべて高宅を巧みに作り料理の美味に包丁の手際なる器物には、善尽し客の需めに応ずるは辺鄙には賞すべきか、殊に辻竹輿は何挺となく、両店の前に居流れて、草臥の人を扶けて歩行さらしむ、猶又四五年このかた虫聞とて夏の末黄昏より好事の雅客爰に来り両店の男女に虫籠もたせ、耕地の畝々を逍遙するあり、或は参会頼母子に集会して弁用するもありけり、予が幼少の砌より江戸に名たゝる深川の弐軒茶屋、又本所むかふ島といへども衰微して、今只時めくはむさし屋のみなり、しかるに此地かじけたる片鄙ながら、王子稲荷の門前より、飛鳥山の麓までその間凡四町余、酒楼茶屋おの〳〵軒を同ふし、繁華の土地にも劣らぬ様はひとへに、有徳廟の御仁恵といふべし

一　此山の花王は、立春より七十四日目頃を最中とし、おの〳〵古木にして王子よりは、少し早き方なり、又山上には成島大人のなせる碑あり、青石地上へ出る事高凡七尺幅凡壱丈厚さ八寸余、元文四年己未秋九月と刻せり、文は長きによって略す、此辺おしな

べて紙細工のからくりをひさぎて名産とす

また、天保七年（一八三六）に刊行された「江戸名所図会」一五には、次のようにもある。[49]

当社は遙かに都下をはなるゝといへども、常に詣人絶えず、月毎の午の日には殊更詣人群参す、二月の初午にはその賑ひ言ふもさらなり、飛鳥山のあたりより、旗亭（さかや）・貨食舗（りょうりや）、或いは水に臨んで軒端をつらねたり、実にこの地の繁花は都下にゆずらず

このように、八代将軍徳川吉宗によって、享保期（一七一六～三六）に飛鳥山へ桜が植樹され、後に江戸の花見の名所となり、さらに王子稲荷信仰の盛行にともなって、飛鳥山から王子稲荷社への参道沿いに、料理屋・茶屋が建ち並ぶようになっていった。「武江年表」の寛政年間記事によると「寛政十一年春より、王子村料理屋海老や・扇屋見せ開きあり」とある。[50]扇屋は創業を慶安元年（一六四八）と伝えており、海老屋も寛政一一年（一七九九）以前から料理屋として営業していたと考えられる。例えば、社殿裏の石垣は三期に分けて築造されたが、第一期は寛政七年に築造費用の勧募をし、同八、九年の二年間で築かれた。この時に扇屋・海老屋が重要な役割をはたしていたことも一つの証左となろう。[51]この「武江年表」の記事は、おそらく「江戸名所図会」に描かれたような、二階に望楼をもち、石神井川をはさんで向い側に庭園をもつ料理屋として開店したのが、寛政一一年ということなのであろう（図13参照）。いずれにしても、これ以降に海老屋・扇屋は、王子の料理屋として江戸市民によく知られるようになっていった。

文化七年（一八一〇）に成稿した太田南畝の「金曽木」には、

王子の茶屋は菜めし田楽のみにて、青魚に三葉芹の平皿にもりたるのみなりしに、今は海老屋・扇屋などいふ料理茶屋出来て、その余の茶屋もその風を学ぶ事となりぬ

とあるし、[52]文政五年（一八二二）に成稿した青山白峯の「明和誌」には、

安永の末までは、梅若辺至つて田舎、王子、亀井戸辺とても、いり菜の平汁成しに、今はいづれも料理屋ありて繁昌す

ともある。[53]さらに、成稿年次は不明だが、片山賢の「寝ぬ夜のすさび」巻三にも、

今江戸の料理茶屋にて、客のくひたるものの残りたるを、籠に入れ持帰らするは、この海老屋・扇屋よりはじまれり、これを真似てしかせしものありてより、今はかかる茶屋の常の如くなれり

とあるので、[54]江戸市民からもよく知られた料理屋であったことが確認できよう。こうしたことは、一八世紀末から一九世紀にかけて、それだけ王子を訪れる人々が多くなっていったことを物語っているのであろう。

五　王子の狐人形

近世後期に、王子稲荷の参道では、狐を擬人化した簡単なカラクリ細工の紙人形が売られていた。これを本稿では、ひとまず狐人形と呼ぶことにしよう。

現在でも王子稲荷神社の社務所で、縁起物として「暫狐」一種類であ

るが、狐人形が頒布されている（図14参照）。細い竹棒二本を組み合わせた簡単なカラクリ細工の紙人形である。いわれ書には次のようにある。

『暫狐』のいわれ

江戸時代、名優九代目団十郎が、歌舞伎狂言「暫」の上演に際し、王子稲荷に祈願して大当りをとった、という故事に因み、当時流行のからくり仕掛けを応用して作った玩具です。

舞台姿の狐が、竹串の上下につれて、中啓を振り、「暫く暫く」の動作をするのが珍しく、王子稲荷詣での土産として、もてはやされています。

九代目市川団十郎は天保九年（一八三八）に生れ、明治七年（一八七四）九代目を襲名し、明治三六年に没した。[55] 九代目は団十郎襲名以前の河原崎権十郎時代の元治元年（一八六四）中村座を第一回目とし、襲名後の明治一一年新富座、明治二八年歌舞伎座と、三回「暫」を上演している。[56]

また、清水晴風による郷土玩具図録で、明治二四年（一八九一）に芸艸堂から刊行された『うなゐの友』第一篇に、暫狐が載っているが（図15参照）、「江戸王子土産の手遊ひ、今ハ絶へてなし」と説明されている。同じく大正二年（一九一三）に刊行された第六篇にも、狐人形が載せられ（図16参照）、「江戸時代武蔵国王子稲荷の土産玩具」と説明されているし、明治二六年版行の「見立十二支 ㊌ 王子稲荷」という錦絵には、相合傘の狐人形が描かれている（図17参照）。

右のことから、「暫狐」は明治中期にはすでに廃れてしまっていたが、狐人形そのものは健在であったと理解できる。とすると「暫狐」の創出は、第一回目か、第二回目の上演に関わると考えられそうである。しかし、文政五年（一八二二）頃に版行された広重の「今様弁天づくし　王子滝ノ川」に「暫狐」が描かれているし（図18参照）、文政一二年頃刊行の「誹風柳多留」一〇九編には、

暫くとまたせ海老屋の土産物

団十と粂三王子でもたて物

門口の海老ハ王子のかざりなり

という川柳があることからすると、[57]「暫狐」は七代目市川団十郎に因むものと理解するのが妥当であろう。七代目団十郎は、寛政三年（一七九一）に生まれ、同一二年に一〇歳で団十郎を襲名し、家の芸として歌舞伎十八番を制定した。天保三年（一八三二）に長男海老蔵を八代目とし、自らは海老蔵を称した。安政六年（一八五九）に六九歳で没した。[58] 七代目団十郎による「暫」の上演は、団十郎襲名以前を含めて次の上演が確認できる。[59]

寛政八年（一七九六）　河原崎座顔見世「厳雪顔見世」
享和三年（一八〇三）　市村座顔見世　「初雪物見松」
文化元年（一八〇四）　市村座顔見世　「顔観玉簾雪故郷」
文化六年（一八〇九）　市村座顔見世　「貞操花鳥羽恋塚」
文化八年（一八一一）　市村座顔見世　「厳島雪御幣」
文化九年（一八一二）　森田座顔見世　「雪芳野来人顔鏡」
文化一〇年（一八一三）　市村座顔見世　「戻橋背御摂」

文化一二年（一八一五）中村座顔見世　「四天王御江戸錦」
文政元年（一八一八）　玉川座顔見世　「四天王産湯玉川」
文政四年（一八二一）　市村座顔見世　「何種亀顔触」
文政六年（一八二三）　市村座顔見世　「大和大和花山樵」
文政九年（一八二六）　市村座顔見世　「伊勢平氏恵顔鏡」
文政一一年（一八二八）河原崎座顔見世「魁源氏騎士」
天保元年（一八三〇）　河原崎座顔見世「一陽来復渋谷氏」

「暫狐」が、このうちのどの上演に因んだものかは、明らかにしえない。

さて、それでは狐人形そのものは、いつ頃成立したのであろうか。現在確認しうる限りで最も古い記事は、文化五年（一八〇八）に刊行された「誹風柳多留」四六編の「こん〳〵を串ざしにする王子道」という川柳である。[60]

先にも引用したが、文化一一年（一八一四）頃に訪れた十方庵敬順は「此辺おしなべて紙細工のからくりをひさぎて名産とす」と指摘している。[61]また、天保九年（一八三八）頃に成稿した「砂子の残月」には、

王子稲荷

二月初午最群集す、西ヶ原より先田のくろにて百穀の種物を売、

参詣の諸人帰路紙製の狐を買て土産とす

というように、[62]王子稲荷の参道で、土産物として狐人形が売られていたことが確認できる（図19参照）。弘化三年（一八四六）に成稿した「江戸風俗惣まくり」にも、「紙細工の狐は道行人の頭に宿り」と記されている。[63]

さらに、天保四年の序文をもつ「世のすがた」には、

王子土産の狐も近来は錦絵同様にたくみに作り、芝居者の似顔笑ひ絵など作り出す、これらいずれも麁末にて田舎の品めき珍らしきを愛する主意も、いつか江戸市中の品に殊ならざるよふになりけり

とあり、[64]狐人形が歌舞伎役者の舞台姿を写し、徐々に錦絵のように華やかなものとなっていったことがわかる。

文政一二年（一八二九）頃刊行の「誹風柳多留」一〇九編には、前掲の川柳の外に、次のような川柳も収録されている。[65]

王子帰の頭はおもちやの紙やどり
弁慶へ忠信をさす王子道
王子のみやげあら壁といふ背中

また、葛飾北斎の錦絵「王子」（図19）や「王子稲荷」（図20）、文政五年（一八二三）の「馬尽　初午詣」（図21）、広重の「諸国名産東都王子土産飛鳥山花」（図22）、国芳の弘化二年（一八四五）頃の「江戸じまん名物くらべ　王子みやげ」（図23）、北渓の「江戸名所春興昼王子恵方参　和唐内」（図24）にも狐人形が描かれている。

このように、狐人形は、川柳や錦絵のテーマとしても多くとりあげられるほどに、王子土産として、江戸市民によく知られていたのである。

なお、嘉永六年（一八五三）の序文がある「守貞漫稿」には、「王子土産ノ動絵」として「王子ハ武ノ地名、動ヱハ管頭ノ人物ノ絵ヲキリヌキ粘シ、管中ニ細串アリ、コレヲ上下スレハ彼人物手足等ヲ動ス」[66]というように、カラクリの様子が記されている。このカラクリ仕掛けは管人

形のカラクリで、現在のものとは異なっている。

本節では、王子土産の狐人形についてみてきたが、これを簡単に整理しておこう。一八世紀中期以降の江戸市中での稲荷信仰の盛行にともない、王子稲荷も多くの参詣者を集めるようになり、参道の両側に茶店が建ち並ぶようになっていったことは、前述したとおりであるが、この参詣者を目当てに、当時流行の管人形[67]（紙と竹を用いたカラクリ人形）を応用した狐人形が作られ、参詣者への土産品として売られるようになった。はじめは素朴な絵柄であったようだが、後には錦絵のように華やかなものとなり、歌舞伎役者の舞台姿を写したものも売られるようになっていった。そして、江戸歌舞伎界のスーパー・スター市川団十郎と結びつけた「暫狐」が創出されていったのである。たわいのない玩具であるが、この狐人形を手に入れることができたのも、王子を訪れる楽しみの一つとなっていき、王子土産としてもてはやされたのであろう。

なお、本稿の論旨から逸脱してしまうが、明治以降の狐人形の変遷について付言しておこう。前述したように、「暫狐」は明治中期には廃れてしまったが、狐人形そのものは、まだ売られていたようである。しかし、明治後期には、狐人形自体も廃れてしまった。

昭和七年（一九三二）春、有坂與太郎氏が「暫」と「勧進帳」の弁慶を模した人形を復活し、稲荷境内にあった茶店栄屋で売出した。その時に、次のような由緒書が貼布されて売られた。

王子みやげの狐のからくりは寛政より化政度へかけて流行したもので、今日では全く忘れられて居ります。新時代を意識する者には、これらの存在は何らの価値すら認められないでありませうが、適には古川柳に云ふ「こん〳〵を串さしにする王子道」の気分に浸る位の余裕があつても宜いと思ひます。その点から、狐のからくりの復活が決して無意義でない事を信じて居ります。

昭和七年初午　　有坂與太郎記

王子稲荷地内　栄　　や

しかし、これは世人の注目を引くところとならず、すぐに廃絶してしまった。[68]その後、昭和三〇年（一九五五）頃に地元の明友会という郷土愛好グループが「暫狐」を復元し、販売するようになったという。[69]現在の「暫狐」は右のデザインを少し変えたもので、一四、五年前から社務所で頒布するようになったという。[70]

六　落語「王子の狐」

稲荷といえば狐というが、古くは穀神として信仰されていた狐が、のちに稲荷信仰が広まるにともなって、稲荷大明神の使いとなり、霊的な力を持つと考えられるようになっていった。そして、狐は人に憑いたり、人を化かしたりすると信じられていた。人を化かすパターンとしてよくいわれるのは、狐が頭の上に木の葉をのせ、クルッと一回転して美しい女に化け、通りかかる男をだまして、家に引き入れ、風呂をすすめ、酒食を饗する。人から声をかけられ、男が我にかえると、実は風呂だと思ったのが肥溜であり、酒食と思ったのが馬の尿・糞であったことに気づ

くというものである。この外にも近世の随筆類などには、狐にまつわる話は数多く載せられている。これは昔の人々にとって狐がごく身近な動物であったことを示している。

さて、王子稲荷社と狐にまつわる話としては、落語の「王子の狐」がよく知られているが、この咄も最近あまり演じられなくなっているので、簡単に説明しておくことにする。

まだ王子がのどかな田園風景を残していた頃、ある男が王子稲荷に参詣する途中で、狐が美しい女に化けるのを目撃し、だまされた振りをして、王子の料理屋（扇屋とも海老屋ともいう）に連れ込み、酒をすすめ、料理を食べる。男は狐が酔って寝込んだすきに、土産までせしめて、代金は連れが払うといって逃げてしまう。狐は店のものに見つかり、さんざんに打ち叩かれて逃げる。男は狐をだましたことを人に吹聴するが、逆にあとのたたりが恐いといわれ、翌日ボタ餅を土産にあやまりに行き、住処の穴の入口にいた子狐に土産を渡してかえる。子狐は母狐に報告して、土産のボタ餅を食べようとすると、母狐は「食べるんじゃない、馬糞かもしれない」。

この咄は、狐が人を化かすということが信じられていた時代に、人が狐をだますところにおかしみがあり、オチの「馬糞かもしれない」というのも、狐が人をだまして馬糞をごちそうとして食わせるところを、逆に人に化かされるのではと考えた母狐の言葉が笑いを誘うのである。本節では、この落語「王子の狐」の成立についてみていくことにしよう。

「王子の狐」は、明治一六年（一八八三）に二四歳で真打となった円朝門下の初代三遊亭円右が「高倉狐」という咄を大阪から移植したものといわれている。[71]

「高倉狐」の筋立ては、ある男が高津高倉稲荷を通りかかると、狐が若い女に化けるのを目撃したが、だまされたふりをして近くの湯豆腐屋に連れ込み、狐に酒を強いて酔い倒れたすきに、勘定は女からもらってくれと逃げてきた。狐は店の者にみつかり、さんざんに痛めつけられる。狐をだました男は、友人に吹聴して歩いたが、あとのたたりが怖いとおどされ、ボタ餅を手土産に高津の裏山を訪れ、子狐に渡して帰る。それを親狐に報告すると、「あんな奴が持ってきたもんが、馬の糞やもわかれへん」というようにまとめられ、[72]舞台を高津から王子に移すと、そのまま「王子の狐」となるのである。類似の咄に「乙女狐」があり、文久元年（一八六一）大坂の桂松光のネタ帳「風流昔噺」に、

狐　人げんにばかされる
　但シ　まいげぬらし　落

とあるのがそれである。オチは「狐がしきりに眉毛に唾をつけていた」である。眉毛に唾をつけるのは、人が狐に化かされないようにするためのまじないであるが、それを狐がしているところにおかしみがある。「高倉狐」の方がおかしみが多いので、「乙女狐」の方はいつかすたれてしまったという。[73]

さて、「高倉狐」の原型は、「初心な狐」と「北国奇談巡杖記」を参考にして作られた咄であるとされている。[74]

「初心な狐」は、正徳二年（一七一二）に江戸で刊行された笑話集「新

話笑眉」巻一に収録されているが、それを次にあげておこう。(75)

初心なきつね

亀井戸の藤見にゆかんとぶら〳〵と行けるに、小狐此男を見てばかさんとや思けん、忽うつくしき若衆にばけて来り、あとや先に成て行ける、此男はじめより化たるを見すましけるが、態としらぬかほにて、是々おまへはおひとりそうなが、どこへ御出なさるゝといふ、いや私は亀井戸の藤見に参ますと云、かの男私も藤見に参ます、幸の事御同道申ませう、さやうならば御つれ被成て被下ませいと打つれ、程なく亀井戸に着、ふじ最盛中なるを見あるき、いかうくたびれました、酒一つ上ませうとて茶屋へ寄料理抔いゝ付、かの化若衆にひじいにくはせ、日もたけましたいざ帰ませうと打つれ、もと来し道に帰りけるに、はじめ化出し所とおぼしき辺にて、かの若衆、私は此近所の者、扨々けふはかたじけなふござりますといふてわかれける、かの男跡よりかの化若衆をつけて見けるに、狐の穴とおぼしき所へはいりける、あなへ耳をよせてひそかに聞ゐたりしが、穴のうちにて云様、扨々けふはいかふ馳走に成てと云、それはどこでといふ、されば〳〵と右の趣をかたる、親狐にや有けん云様、だまりゃれ、それは馬糞であらふ

この話は、亀戸天満宮に藤を見にいく途中で、子狐が美しい若衆に化けたところを目撃した男が、だまされたふりをして一緒に藤を見物し、茶屋で酒や料理を食わせ別れる。子狐は住処の穴に帰り親狐に報告すると、「だまりゃれ、それは馬糞であらふ」。オチのおかしみは同じであるが、人が狐をからかったということであって、狐をだますという咄とはなっていない。

また、「北国奇談巡杖記」は、加賀の俳人鳥翠台北至が、北陸数ヶ国を遊歴した見聞随筆で、文化四年（一八〇七）に刊行された。この巻の五に、「黒丸権四郎哆斑狐」という話が収められている。これを次にあげておこう。(76)

○黒丸権四郎哆斑狐

同国坂北郡三国の入江は、人王二十七代継体天皇いまだ大跡辺の王子と申せし頃、まし〳〵ける旧地なり、今は北国第一の大湊にして、娼家粉頭店軒を並べて繁花たり、爰に出村とて続て私料子、遊君、粉黛を粧ふ。中に黒丸権四郎といふ、しば〳〵角力に名を振ひたる若ものありけるが、夜行大酒を好、あるとき細呂木といへる駅に用要ありて、昼より出けるに、用談に日を暮し、既に夜半におよびし故、人々とゞめしかど、かの不敵なるものから、山路茂林不管犬狼の患も知らざれば、闇夜に馬撾打てほゝゑみかへりしが、半道あまり過つらんとおぼしきころ、こなたの松原に鬼火をてらし、斑毛の狐、薜荔を身にまとひ、ひとり躍を催しゐける。黒丸も、あまりの怪しさに箍口て通りけるに、黒丸を見るより二扮して、若衆と変ず、黒丸もこゝろにそれとしりながら、態と何の様子もしらざるけしきにて過行けるに、かの若衆脂顔して、申々と声かけたり、もとより強気の権四郎なれば、踏とゞまりて、何事候といふに、われは大聖寺のさる町人の悴なるが、三国通に金銭を弃しものなり、何卒親元

まで送りとゞけたまはれといふ、黒丸いふよう、是安きことなり、しかし余ほどの道程なれば、この先の茶屋にて支度して送りとゞくべしといふ。さらば我も連てともに酒にてもたうべしといふに、点き、村端の茶店を打き起して、黒丸いふやう、三国通のさる有徳の人の嫡子なり、此御客酒一献くみたきよし、はやく調ひ出すべしといふ。亭主心得顔にて、先鯉の薄味噌、鮭の鱠、松茸のあつものに、摺柚よ、酒滲めよといふまゝに、家内婢も呼起し、一間に請じて若衆を伴ひ、黒丸とふたり、数杯を別杯にかたむけ、珍味飽くまゝに喰ひつゝ、時分は爰ぞと黒丸、勝手に満足して、我は少々用事ありて先に行くべし、払は御客よりたまはるべしとて、我屋をさして逸足にたちかへりぬ、跡に若衆ひとり黒丸を呼ぶに、亭主立出、それは先刻御帰り候ひぬ、是々の雑用代金壱歩七百文たまはるべしといふに、斑狐も渠に脅やかされて、少間愕くといへども、もとより吼喊のことなれば、九尾を振て走りまはるを、亭主、怒りて棒を捻りて追へども〳〵つゞかばこそ、其うちに木綿告の鶏うたひ、山かづら引明て、口おしくも八顛九倒し、泣々亭主はねむたげに楷かゝへて帰りけるこそ、よく〳〵の災なり、只黒丸ひとり甘味を味ひ、そのうへ哆しもあるべきか、狐を嬲しは希代の発明、あはれにも亦をかしき事なん侍る

この話は相撲で名を売った越前三国の黒丸権四郎が、夜行していると狐が若衆に化けているところを目撃し、化かされたふりをして、村はずれの茶屋に入り、たらふく酒食をして、狐を残して逃げ出す。だまされた狐は茶屋の亭主に追い回されるが、うまく逃げてしまう。この話には「馬糞」というオチはなく、狐をだましたのは「希代の発明」と結んでいる。

この「初心な狐」と「北国奇談巡杖記」をもとにしてつくられた「高倉狐」の成立時期を明らかにすることはできない。また、江戸の落語家喜久亭寿暁の文化四年(一八〇七)のネタ帳「滑稽集」に「馬くそ」という題名があるから[77]、初代三遊亭円右が「高倉狐」を大阪から移植する以前に、江戸でも類似の咄はあったものと考えられる。ただこの「馬くそ」が、王子を舞台としていたかどうかはわからない。しかし、平戸藩主松浦静山が文政期(一八一八〜三〇)に編んだ随筆「甲子夜話」巻二一に、王子の料理屋鰕屋を舞台として、落語「王子の狐」と同様の話が収録されている[78]。

近きこととぞ、乗物町に住る乗物師の新助と云もの、王子稲荷にゆく迚田疇を行に、傍なる叢中にて狐の化る所を見る、程なく後より娼妓一人来る、新助これぞ先の狐ならんと思ふに、妓云ふ、同行の客に離たり。冀くは其人を尋て連行給へと、新助心よく諾し、我が行く方へ伴はん迚、王子村にて名高き蝦屋と云る大店に上り、まづ酒肴数品を云つけ、妓とともに飲食し数盃を傾け、厠にゆく迚出たり、妓因て孤坐してありしが、余り久く此の如くゆゑ、店の男女不審に思ひ、何にして独り居るやと聞けば、つれは厠にゆきたりと答ふ、夫より厠を見れど居ず、されば已れ独りなり、酒食の代を払ふべしと云ふに、妓答へず、店の者ども腹をたて、伴れもなく独り居

て飲み食ひしふとゞき者なり、若し払はずんば擲のめせとひしめきたれば、妓云ひ訳なき体なりしが、やがて毛尾を現はし狐となりて逃出る、男ども、さては狐なり、打殺せとて追かけしを、店主の、これは若や王子の神ならんも知らずとて追者を止めぬ、この新助は狐に欺れざるのみならず、却て狐を欺きしこと珍きこととの取沙汰なりしとかや

ただし落語「王子の狐」と同様なのは、人が狐をだますところまでで、最後の「馬糞」というオチはなく、「狐に欺れざるのみならず、却て狐を欺きしこと珍きこととの取沙汰なりしとかや」と結んでいる。こうした評価は、先の「黒丸権四郎哆斑狐」と同様である。

前述したように、一八世紀後期以降に、王子稲荷信仰の盛行にともない、王子稲荷社の参道には、料理屋・茶屋が建ち並ぶようになっていった。そして、文政期に王子の料理屋が舞台となった話がみられるようになるのは、江戸市民が王子稲荷社に殺到するようになり、王子が江戸市民の行楽地となっていったことが背景にあったと考えられる。

ところで、落語「王子の狐」が盛んに演じられたのは明治以降のことである。その頃の王子はまだ狐の住処となるのどかな田園風景が展開していたので、咄の雰囲気も伝わったのであろう。明治二六年(一八九三)二月に「王子の狐」を高座にかけた三代目三遊亭円遊は、王子稲荷参詣の帰りに、王子の製紙会社の機械の拝見をしていくというような当時の風俗を挿入しており[79]、狐と近代産業とのコントラストがおもしろい。また、昭和一九年(一九四四)に八代目を襲名した春風亭柳枝は、この咄を好んで高座にかけたが、すでに昔のこととして咄している[80]。しかし、宅地化が進展していくにしたがい、狐もみられなくなると、この咄も演じられなくなっていった。大阪でもしばらく絶えていたが、桂枝雀が昭和五九年二月二四日に「桂枝雀独演会」で復活させた[81]。東京では、最近演じる落語家もあまりいないという。

「王子の狐」や「高倉狐」のように、人が狐をだますというパターンの話は稀である。昔話の世界では、狐が化けるところを目撃しても、結局は狐に化かされてしまうのであって、「王子の狐」のような話は例外的といえる[82]。

これは人と狐、あるいは自然との関係の変化とみることができよう。狐が人を化かすということを受容していた時代は、人が自然を素直に受容していたと考えられるが、人が狐をだますということは、人と自然との関係が変化していき、自然に対して人が優位にたっているという認識が生まれてきたことの別な表現とも考えられる。そして、狐の住処を奪い、ついには狐を動物園に追いやってしまうことになる。

おわりに

これまで江戸名所の一つである王子に焦点をあて、特に、王子権現社・王子稲荷社・金輪寺にかかわる縁起物・土産物などについてみてきた。ここで指摘できたのは、一八世紀中期以降における、江戸市民の名所をめぐる広範な行楽行動の展開の中で、王子が江戸の名所として有名とな

り多くの江戸市民が訪れるようになると、名所の側でも変化がみられるようになってくるということである。多くの人々が訪れることを目当てに、あるいは、さらに多くの人々が訪れるようになるために、名所での楽しみを増幅させる、さまざまな装置が創出されてくるのである。

右のようなことは、王子に限らず、江戸の名所として知られたところでは、同様のことがみいだされるのではないかと思われる。そして、これが名所が存在した地域の住民にどのような影響を与えていったのであろうか。こうしたことを明らかにしていくことが、今後の課題となろう。また、明治以降に名所での楽しみが変化していくと予測されるが、これがもう一つの課題となってこよう。

註

(1) 加藤貴「江戸名所案内の成立」(瀧澤武雄編『論集　中近世の史料と方法』　東京堂出版　一九九一年)。

(2) 絵画における正確性という場合、写真のように事物の細部までそのままに写すという意味ではなく、特定の事物を描いたものを、多くの人が見てそれと認識できるという意味での正確さという意味である。

(3) 王子権現社については、澤登寛聡「王子金輪寺の基本的正確についての覚書―王子田楽の儀礼執行主体として―」(王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化財研究紀要別冊第二集』　東京都北区教育委員会社会教育課　一九八八年)による。

(4) 「若一王子縁起」については、澤登寛聡「『若一王子縁起』絵巻の成立と模本の現状」(『「若一王子縁起」絵巻　文化財研究紀要別冊第一集』　東京都北区教育委員会社会教育課　一九八八年)による。

(5) 宮次男「『若一王子縁起』絵巻と狩野尚信・板谷絵所」(前掲『若一王子縁起』絵巻　文化財研究紀要別冊第一集)。

(6) 今村嘉雄編『増補　体育史資料年表』　不昧堂書店　一九六二年、黒板勝美・国史大系編修会編『増補改正国史大系　徳川実紀』第二・三篇　吉川弘文館　一九六四年。

(7) 小池章太郎『江戸砂子』　東京堂出版　一九七六年。

(8) 花咲一男『再校増補江戸惣鹿子名所大全』　渡辺書店　一九七三年。

(9) 「王子田楽記」(前掲王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化財研究紀要別冊第二集』)。

(10) 前掲王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化財研究紀要別冊第二集』。

(11) 『続日本随筆大成』別巻民間風俗年中行事上　吉川弘文館　一九八三年。

(12) 小林一茶「文化句帖」(信濃教育会編『一茶全集』第二巻　信濃毎日新聞社　一九七七年)。

(13) 小林一茶「田楽見の記別稿」(伊藤正雄『解註　一茶文集』　三省堂　一九四三年)。

(14) 「王子田楽記」(前掲王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化財研究紀要別冊第二集』)。

(15) 十方庵敬順「遊歴雑記」初編の上(『江戸叢書』巻の三　江戸叢書刊行会編刊　一九一六年)。

(16) 大島建彦編『江戸神仏願懸重宝記』　国書刊行会　一九八七年。

(17) 今井金吾校注『江戸名所花暦(生活の古典双書八)』　八坂書房　一九七三年。

(18) 朝倉治彦校注『東都歳事記』2　平凡社東洋文庫　一九七〇年。

(19) 『江戸叢書』巻の九　江戸叢書刊行会編刊　一九一七年。

(20) 『東京都神社史料』第二輯　東京都神社庁　一九七五年。

(21) 山下重民「観王子神社田楽記并考証」(『風俗画報』七六　一八九四年)。

(22) 宮尾しげお「王子田楽祭」(『祭り風土記』　住吉書店　一九五四年)。

(23) 近世の王子田楽については、加藤貴「江戸時代の王子田楽」(前掲王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化財研究紀要別冊第二集』)に詳しい。

(24) 「ひともと草」下巻(『新燕石十種』第二巻　中央公論社　一九八一年)。

(25) 前掲王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化財研究紀要別冊第二集』。

(26) 「王子田楽記」(前掲王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化

財研究紀要別冊第二集』)。
(27) 前掲王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化財研究紀要別冊第二集』。
(28)『日本庶民生活史料集成』第一五巻都市風俗　三一書房　一九七一年。
(29) 鈴木棠三・朝倉治彦校注『江戸名所図会』第五巻　角川文庫　一九六七年。
(30)『江都近郊名勝一覧』　大屋書房　一九八七年。
(31) 前掲王子田楽調査会編『王子田楽総合調査報告書　文化財研究紀要別冊第二集』。
(32) 山下重民「観王子神社田楽記幷考証」(『風俗画報』七六　一八九四年)。
(33) 金輪寺については前掲澤登寛聡「王子金輪寺の基本的正確についての覚書―王子田楽の儀礼執行主体として―」による。
(34)「新編武蔵風土記」巻一八　国立公文書館内閣文庫所蔵。
(35) 前掲『「若一王子縁起」絵巻　文化財研究紀要別冊第一集』。
(36) 朝倉治彦校注・解説『江戸名所記』　名著出版　一九七六年。
(37)『近世文学資料類従』古板地誌編一〇　勉誠社　一九八〇年。
(38) 前掲鈴木棠三・朝倉治彦校注『江戸名所図会』第五巻。
(39) 岡田甫校訂『誹風柳多留全集』第八巻　三省堂　一九七八年。
(40)(41) 前掲「新編武蔵風土記」巻一八。
(42) 前掲『「若一王子縁起」絵巻　文化財研究紀要別冊第一集』。
(43) 前掲朝倉治彦校注・解説『江戸名所記』。
(44) 前掲「新編武蔵風土記」巻一八。
(45)『江戸叢書』巻の九　江戸叢書刊行会編刊　一九一七年。
(46) 宮田登「江戸町人の信仰」(西山松之助編『江戸町人の研究』第二巻　吉川弘文館　一九七三年)。
(47) 十方庵敬順「遊歴雑記」初編の上　三十七王子村稲荷大明神(『江戸叢書』巻の三　江戸叢書刊行会編刊　一九一六年)。
(48) 十方庵敬順「遊歴雑記」初編の上　三十八飛鳥山の花見(『江戸叢書』巻の三　江戸叢書刊行会編刊　一九一六年)。
(49) 前掲鈴木棠三・朝倉治彦校注『江戸名所図会』第五巻。
(50) 金子光晴校訂『増訂　武江年表』2　平凡社東洋文庫　一九六八年。
(51) 加藤貴「近世王子稲荷社の信仰主体―石造物の奉納者の分析をつうじて―」(『文化財研究紀要』五　一九九一年)。
(52) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第一期第六巻　吉川弘文館　一九七五年。
(53) 三田村鳶魚編『鼠璞十種』中巻　中央公論社　一九七八年。
(54)『新燕石十種』第七巻　中央公論社　一九八二年。
(55) 伊原青々園『市川団十郎の代々』下　市川宗家刊　一九一七年。
(56)『(国立劇場)上演資料集』一七三戻橋背御摂　国立劇場調査養成部　一九八〇年。
(57) 岡田甫校訂『誹風柳多留全集』第八巻　三省堂　一九七八年。
(58) 伊原青々園『市川団十郎の代々』上　市川宗家刊　一九一七年。
(59) 前掲『(国立劇場)上演資料集』一七三戻橋背御摂。
(60) 岡田甫校訂『誹風柳多留全集』第四巻　三省堂　一九七七年。
(61) 前掲十方庵敬順「遊歴雑記」初編の上　三十八飛鳥山の花見
(62)『江戸叢書』巻の九　江戸叢書刊行会編刊　一九一七年。
(63)『江戸叢書』巻の八　江戸叢書刊行会編刊　一九一七年。
(64) 三田村鳶魚編『未刊随筆百種』第六巻　中央公論社　一九七七年。
(65) 前掲岡田甫校訂『誹風柳多留全集』第八巻。
(66) 朝倉治彦編『守貞漫稿』中巻　東京堂出版　一九七四年。
(67) 山田徳兵衛『日本人形史』　冨山房　一九四二年。
(68) 有坂與太郎『郷土玩具大成』第一巻東京編　建設社　一九三五年。
(69) 永田久光『日本の郷土玩具』　創元社　一九五六年。
(70) 王子稲荷神社宮司談。
(71) 前田勇『上方落語の歴史』　杉本書店　一九五八年、飯島友治編『古典落語』第二期第一巻　筑摩書房　一九七一年、暉峻康隆・興津要・榎本滋民編『口演速記明治大正落語集成』第二巻　講談社　一九八〇年。
(72) 宇井無愁『落語の根多』　角川文庫　一九七六年。
(73)『日本庶民文化史料集成』第八巻　三一書房　一九七六年。
(74) 飯島友治編『古典落語』第二期第一巻　筑摩書房　一九七一年。
(75) 前掲宇井無愁『落語の根多』。
(76) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期一八　吉川弘文館　一九七四年。
(77) 前掲『日本庶民文化史料集成』第八巻。

(78) 中村幸彦・中野三敏『甲子夜話』二　平凡社東洋文庫　一九七七年。
(79) 暉峻康隆・興津要・榎本滋民編『口演速記明治大正落語集成』第二巻　講談社　一九八〇年。
(80) 前掲飯島友治編『古典落語』第二期第一巻。
(81) 相羽秋夫『現代上方落語事典』少年社　一九八七年。
(82) 関敬吾『日本昔話集成』二ノ三　角川書店　一九五五年。

追記

本稿脱稿後に、宮川政運がまとめた考証随筆で、慶応元年（一八六五）の序のある「俗事百工起源」巻之下に、次のような記事があるのを確認した。

王子紙人形の始

一王子の名物紙人形のはしめハ、むかし世に長唄てふに名を得し二代目荻江寄友（露カ）といへる者の伯父なるもの名を八郎右衛門と呼（苗字ハ憚りて除く）このもの親元より手当を取て王子近辺のわひ住居せし折、紙にて人形を拵へ手頭の動くやうの工夫をなし、丹にごふんにていかゝの色とりして門口に出し売りしか、子供の土産にハ面白しとて参詣の人毎に求めし故、思ひの外なる利潤を得しかは、其近辺のものも同しく拵らへ売しかはしめにて、今は王子の名物とハなりぬ、此寄友の子孫なるものハ予か莫逆の友なり、右八郎右衛門世を去りしハ安永六酉年正月廿二日なり、此紙人形ハ安永以前の事なれハ僅百十年か二十年はかりの内なるへしと話されける

（北区史編纂調査会編『北区史』資料編近世Ⅰ　東京都北区　一九九二年）

これによると、王子の狐人形は、安永期（一七七二～八一）以前に、二代目荻江露友の伯父で八郎右衛門という人が王子に住居していた時に、紙で人形を作り、頭や手が動くように工夫して、着色して門前で売ったところ、子供の土産として参詣の人びとが買っていったので、思いもよらず利潤をえた。周辺の人たちもこれに習って拵えて売ったところ、今では王子名物となったというのである。安永期には、本文中でも指摘したが、江戸市民の稲荷信仰が流行し、王子稲荷にも参詣者が集まりだした時期であるので、この参詣者を目当てに狐人形が創作されたという説は、それなりの説得性をもっているといえよう。しかし、「俗事百工起源」の記事がどこまで事実を伝えているのか、今のところ確認することはできない。

（国立歴史民俗博物館共同研究員）

"Ōji", A Popular Place in Edo

KATŌ Takashi

As Edo was gradually becoming a huge and overcrowded city, its surrounding nature was getting lost. As an easy relationship with nature became difficult for Edo citizens, they visited attractive places in suburban areas to compensate for the loss of nature around them. On the other hand, the citizens kept their personal interest and visited temples and shrines, in order to spiritually protect themselves from such bad luck as disease, fire and being the victim of robbery (impediments to the normal way of general public life), and to pray for prosperity in business. In this way, those popular places enabled Edo citizens refresh their minds by way of a relationship with nature and a spiritual exchange with gods. The early indications were shown in the middle of the 17th century. In particular, from the 18th century, a lot of noted places were established in suburban areas of Edo, and Edo citizens developed extensively entertainment activities, touring popular places. I took "Ōji", which was well known as one of the famous popular spots in Edo, as an example in order to elaborate the above points. Ōji was the place 10km north of Nihonbashi, where they made a day's trip and enjoyed a rich and varied nature including the lowlands along the Arakawa river, the Musashino tableland and a beautiful valley produced by the Shakujii river which ran into Arakawa river. In addition, there were the Ōji Gongen Shrine, the Ōji Inari Shrine and the Kinrinji Temple which strongly guaranteed a profitable business. For these reasons, Ōji gradually attracted many Edo citizens all the year round as a pleasure resort where they could enjoy the Hatsu-uma festival in the Ōji Inari Shrine and cherry blossom viewing in Asuka mountain in Spring; the summer festival in the Ōji Gongen Shrine, and bathing under the falls along the Shakujii river in Summer; viewing the scarlet autumn leaves and hearing the singing of insects in the Takinogawa, a path along the Shakujii river in Autumn, and snow viewing in Winter. "Yarigata" (paper cut in sword shape) was a good-luck charm exchanged at the festival at the Ōji Gongen Shrine in order to spiritually protect them from bad luck. "Gokō-tō" was a universal panacea distributed to the visitors at the Kinrinji Temple. The mechanical fox dolls were sold as a souvenir in the approaches to the Ōji Inari Shrine, and the well-known Rakugo (comic monologue) story "Ōji-no-Kitsune" (the fox in Ōji) was created. In the light of the establishment of the above and the change of manners and customs of the people, we could conclude that this noted place also created various attractions and devices aimed at the visitors (or in order to attract more visitors) when Ōji gradually become famous as a popular place in Edo and many Edo citizens visited this place from the middle of the 18th century.

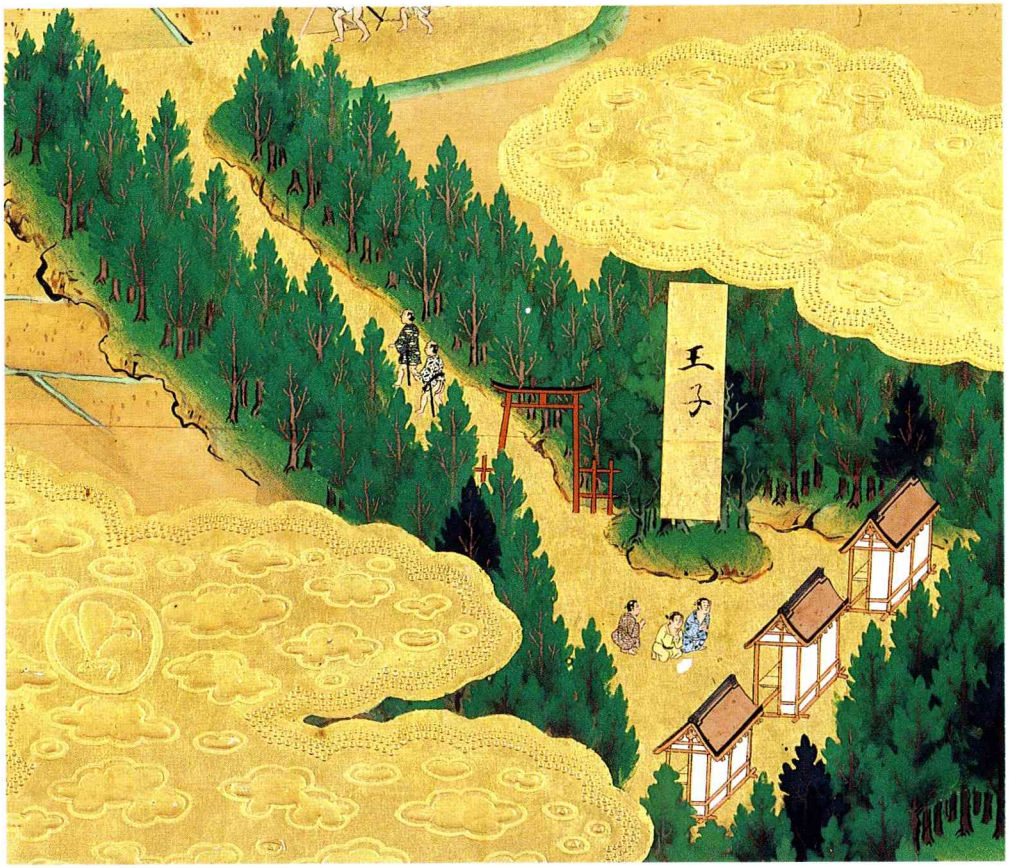

図1　「江戸図屏風」右隻3扇下（国立歴史民俗博物館所蔵）

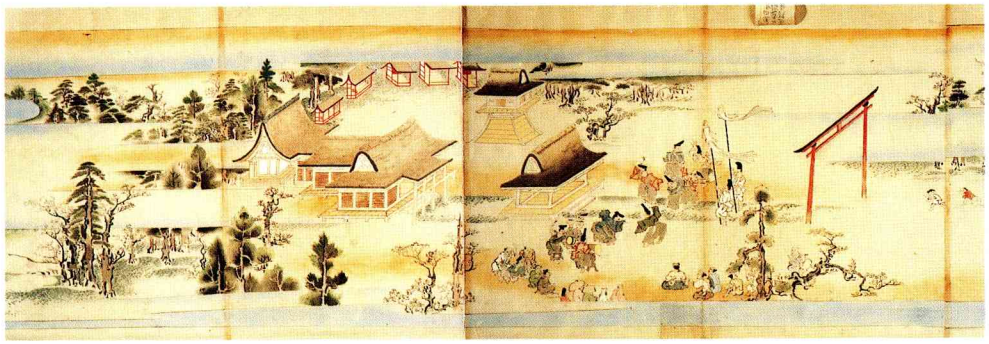

図2　寛永11年造営以前の王子権現社殿　「若一王子縁起」上巻第1段（財団法人 紙の博物館所蔵）

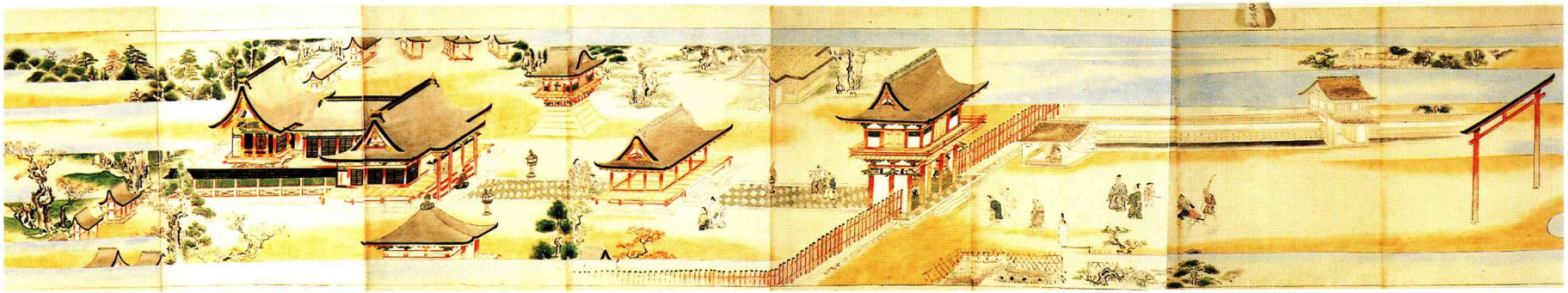

図3　寛永11年造営後の王子権現社殿　「若一王子縁起」下巻第3段（財団法人 紙の博物館所蔵）

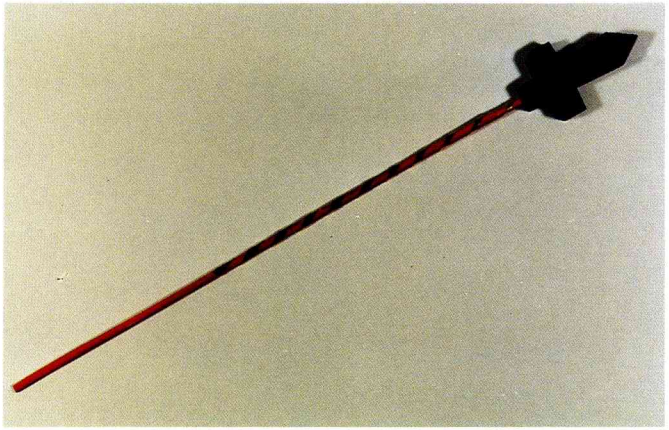

図4　現在王子神社で頒布されている槍

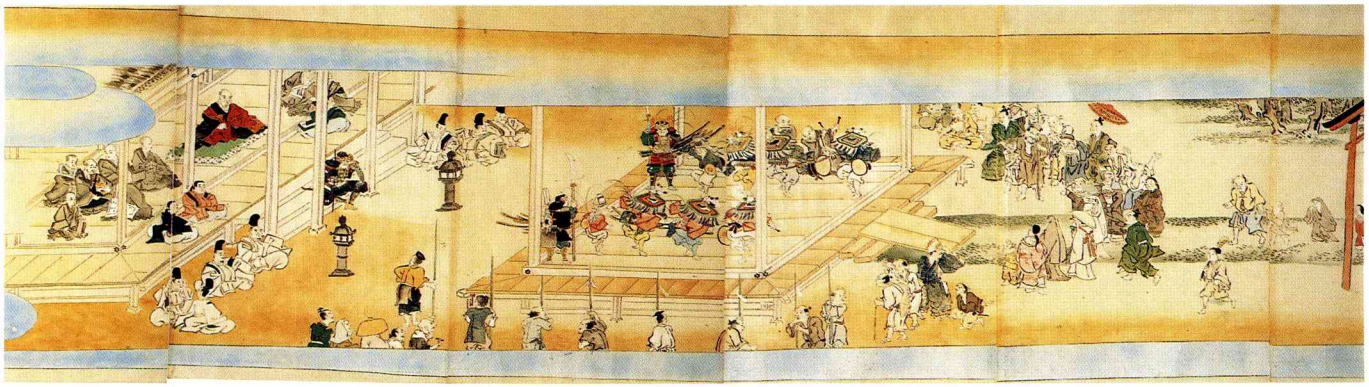

図5　王子田楽　「若一王子縁起」中巻第1段（財団法人 紙の博物館所蔵）

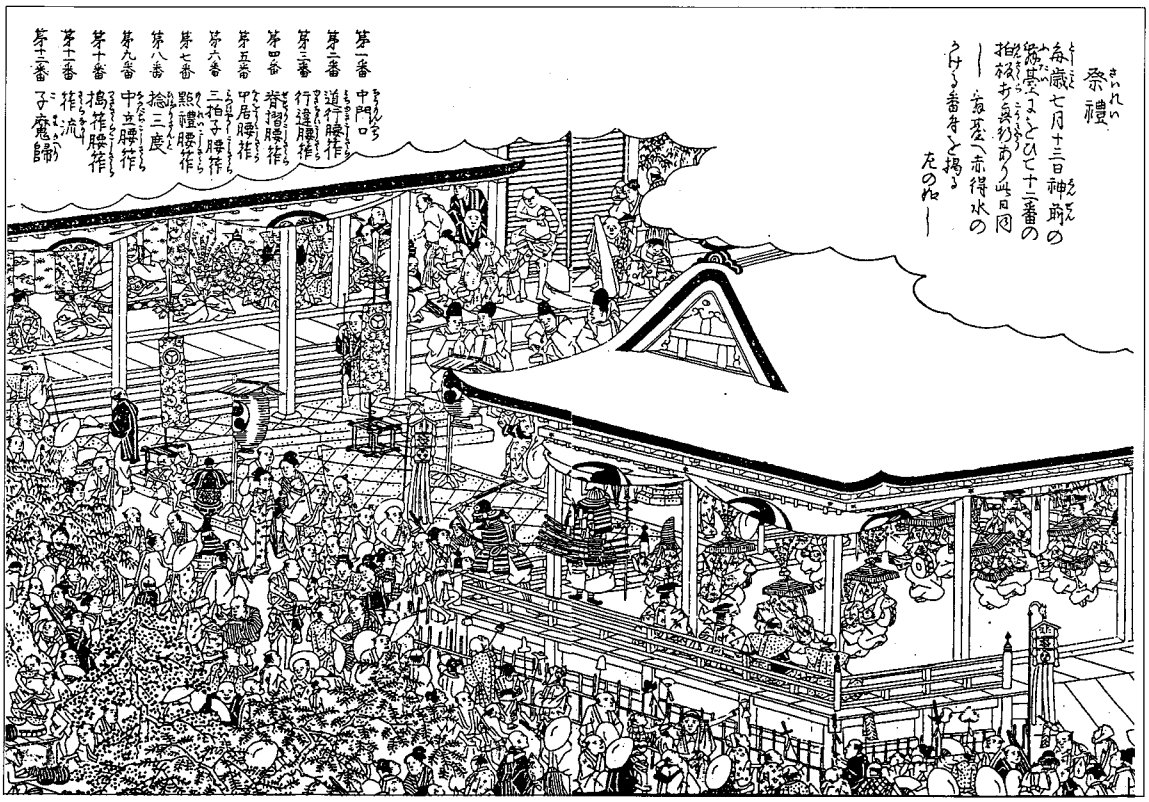

図6　神楽殿の周囲の竹垣に奉納された槍　「江戸名所図会」15（国立歴史民俗博物館所蔵）

図7　槍を持ち帰る人　「江戸神仏願懸重宝記」（東京都立中央図書館所蔵）

図9　槍を持つ村童　本間游清「見田楽記」
（東京都北区教育委員会所蔵）

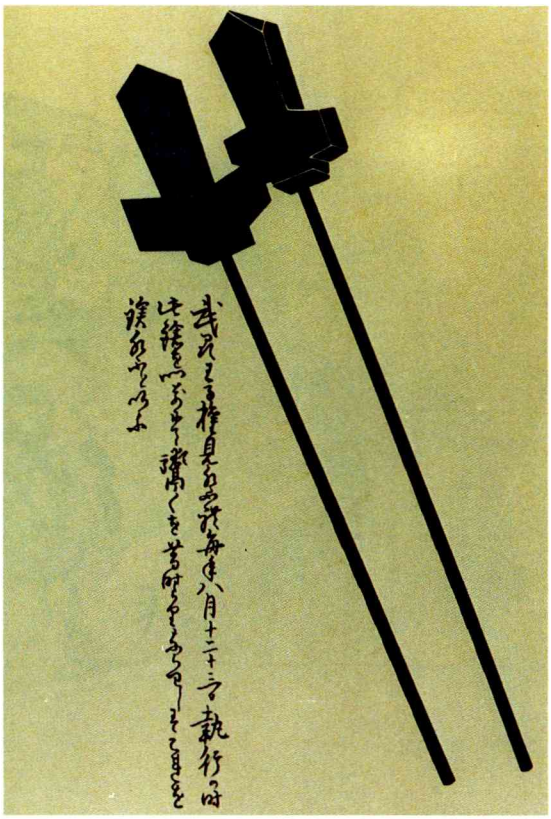

図8　清水晴風『うなゐの友』第4篇
（芸艸堂　1908年）

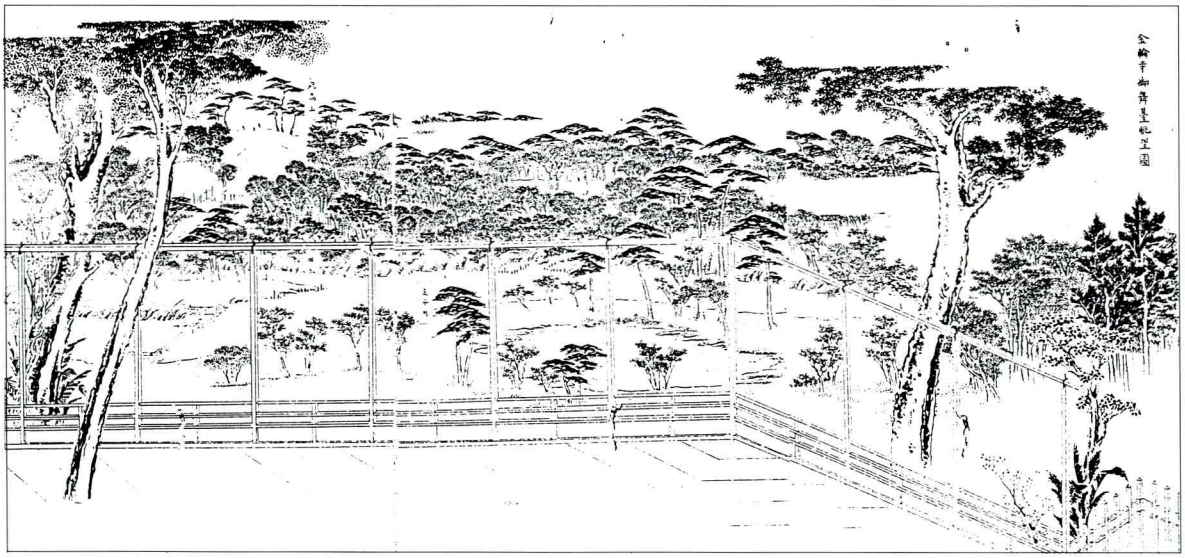

図10　金輪寺舞台　「新編武蔵国風土記」巻18（国立公文書館内閣文庫所蔵）

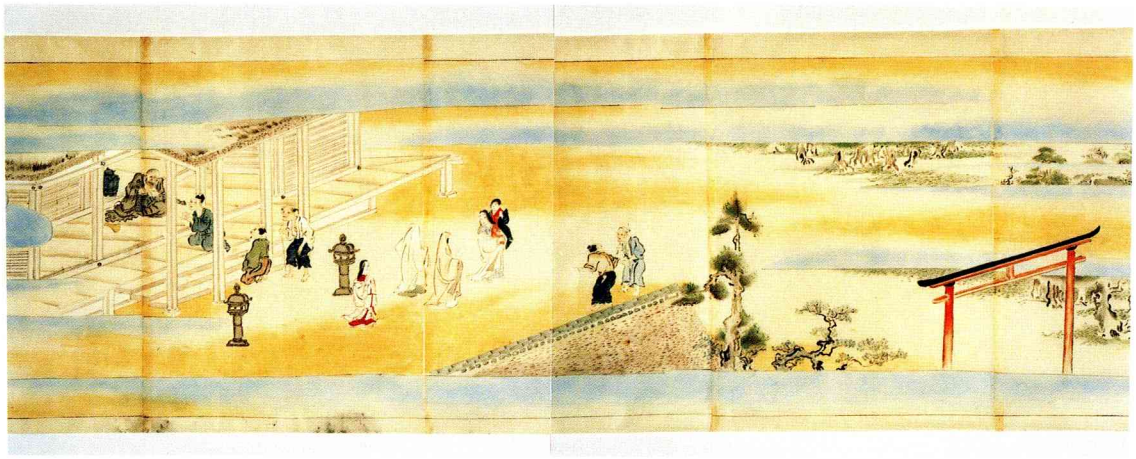

図11　五香湯授与　「若一王子縁起」下巻第２段（財団法人 紙の博物館所蔵）

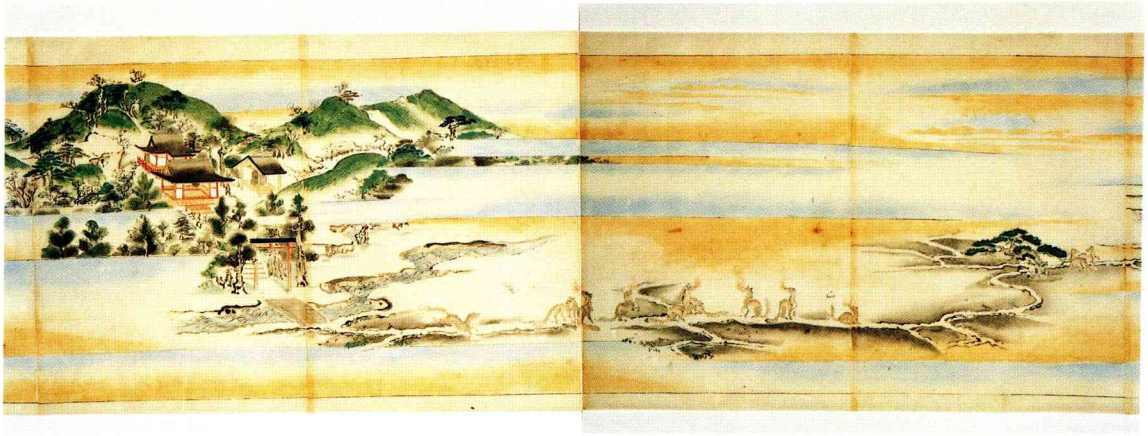

図12　狐火と王子稲荷社　「若一王子縁起」下巻第１段（財団法人 紙の博物館所蔵）

図13　王子の料理屋　「江戸名所図会」15（国立歴史民俗博物館所蔵）

図14　現在王子稲荷神社で頒布されている暫狐

図16　清水清風『うなゐの友』第６篇
（芸艸堂　1913年）

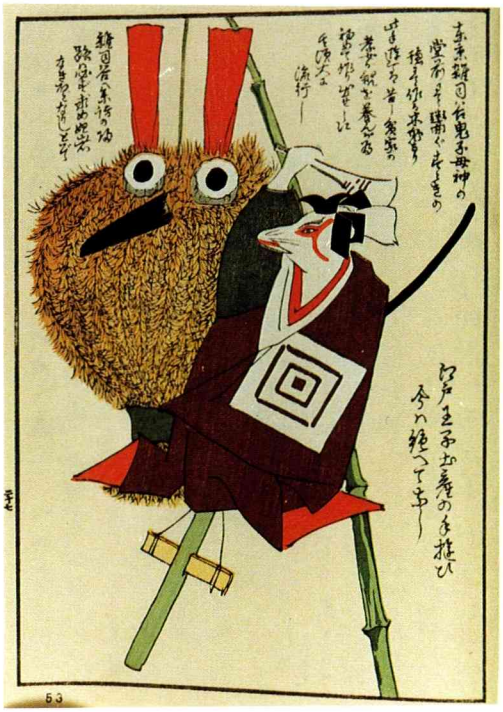

図15　清水清風『うなゐの友』第１篇
（芸艸堂　1891年）

図17　「見立十二支　㊌　王子稲荷」摂州周延画
明治26年(1893)（財団法人 紙の博物館所蔵）

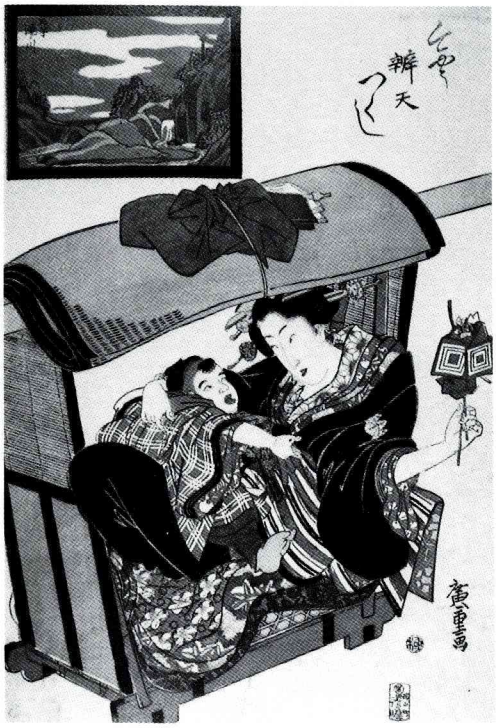

図18　「今様弁天つくし　王子滝野川」
広重画　文政５年(1822)頃
日本浮世絵協会編『シーボルト江戸参府150年記念 オランダ国立ライデン民族学博物館所蔵　シーボルトコレクションを中心とした浮世絵展図録』(1976年)より転載

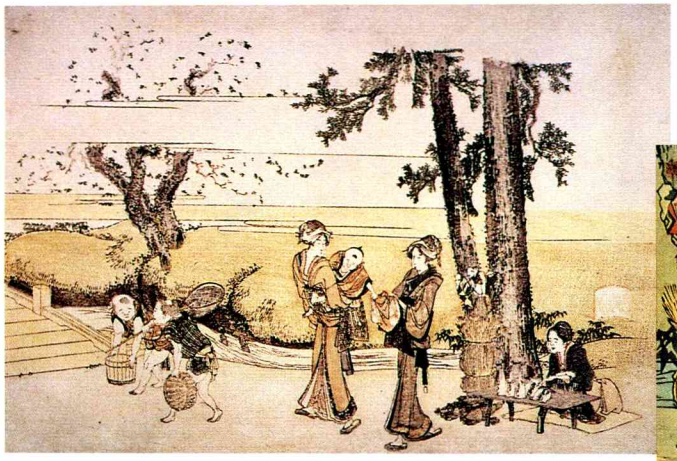

図19 「王子」 北斎画（葛飾北斎美術館所蔵）

図20 「王子稲荷」 北斎画（財団法人 紙の博物館所蔵）

図21 「馬尽　初午詣」 不染居為一画
文政５年(1822)
『江戸が生んだ世界の絵師「大北斎展」図録』（朝日新聞社　1993年）より転載

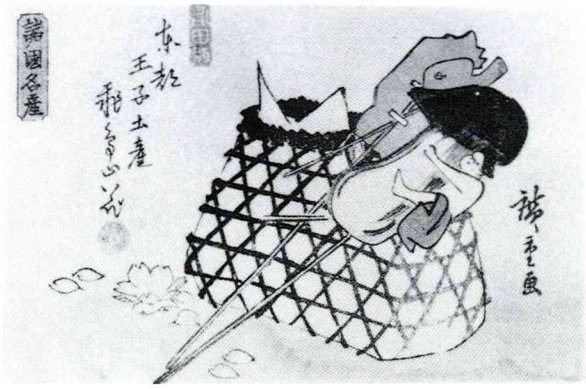

図22 「諸国名産　東都王子土産飛鳥山花」 広重画
日本浮世絵協会編『シーボルト江戸参府150年記念 オランダ国立ライデン民族学博物館所蔵　シーボルトコレクションを中心とした浮世絵展図録』(1976年)より転載

図24 「江戸名所春興昼　王子恵方参　和唐内」
北渓画（財団法人 紙の博物館所蔵）

図23 「江戸じまん名物くらべ 王子みやげ」
朝桜楼国芳画　弘化２年(1845)頃
（財団法人 紙の博物館所蔵）